

鞠

智

城

跡

第二十八次調査報告

二〇〇七年三月

鞠智城跡

— 第28次調査報告 —

2007年3月

熊本県立装飾古墳館分館

歴史公園鞠智城・温故創生館

熊本県立装飾古墳館分館

歴史公園鞠智城・温故創生館

歴史公園鞠智城・温故創生館

鞠智城跡

— 深迫門跡における土壙の調査 —

2007年3月

熊本県立裝飾古墳館分館

歴史公園鞠智城・温故創生館

序 文

鞠智城跡は、東アジア情勢が緊迫した7世紀後半に、大和朝廷により築城された古代山城の一つです。全国でも有数の重要な遺跡として、平成16年2月27日付けで国史跡に指定されました。同様の遺跡として、九州では、大野城跡（福岡県）、基肄城跡（佐賀県）、金田城跡（長崎県）の三城があり、いずれも国の特別史跡に指定されています。

現在、熊本県教育委員会においては、遺跡の保存と活用を図るため、平成12年度から県総合計画での「歴史公園の完成をめざして」を目標に、発掘調査の継続と、その成果に基づく整備事業の推進に取り組んでおります。

本書は、今年度に実施した第28次調査の成果をまとめたものです。

発掘調査の実施にあたりましては、文化庁及び鞠智城跡保存整備検討委員会の諸先生方からご指導をいただくとともに、山鹿市教育委員会並びに菊池市教育委員会、また、地元の皆様など多くの方々のご協力を賜りました。ここに厚くお礼を申し上げます。

平成19年3月31日

熊本県教育長 柿 塚 純 男

本文目次

第Ⅰ章 調査の概要	
第1節 調査の経緯と組織	1
1 調査の経緯	
2 調査の組織	
第2節 調査の方法と経過	4
1 調査の対象	
2 調査の方法	
3 調査の経過	
第3節 深迫門跡について	6
1 深迫門跡とは	
2 位置と地形	
3 これまでの調査	
第Ⅱ章 調査の成果	
第1節 深迫門跡の調査	21
1 各トレンチの成果	
2 小結	
第2節 池の尾門跡の出土遺物について	35
1 第26・27次調査	
2 遺物の出土状況	
3 出土遺物	
第Ⅲ章 まとめ	
第1節 深迫門跡の土壙	42
1 土壙の延長	
2 土壙の形状及びその規格	
3 土壙の構造	
4 土壙の材質	
第2節 土壙の構築について	46
1 土壙裾部の整形	
2 土壙の構築手順	
第3節 今後の課題	47

例　　言

- 1 本書は熊本県教育委員会が平成18年度に実施した国庫補助事業の発掘調査報告書である。
- 2 調査の実施にあたっては、熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園鞠智城・温故創生館」が担当した。
- 3 調査期間は、平成18年8月22日から平成19年3月末日までである。
- 4 発掘調査は矢野裕介、長尾至明、前川真由美が担当した。
- 5 現地調査での遺構実測、写真撮影、遺物の取り上げについては矢野、長尾、前川が行った。
- 6 現地調査における、4級基準点測量及びメッシュ杭設置業務を株式会社ダイチプランに、空中写真撮影業務を九州航空株式会社熊本営業所に委託した。
- 7 遺物の整理・実測及びトレースについては矢野、大村ひかりが担当し、前川、菊川直美、青木絵美の補助があった。
- 8 本書の執筆は、第Ⅰ章第1・2節、第Ⅱ章第1節1(1)(2)(4)(5)を長尾、第Ⅰ章第3節、第Ⅱ章第1節1(3)・2、第2節、第Ⅲ章を矢野が行った。
- 9 本書の編集は、熊本県立装飾古墳館分館「歴史公園鞠智城・温故創生館」を行い、矢野が担当した。

凡　　例

- 1 本書に掲載している遺構図の平面座標は日本測地系による。
- 2 現地での実測における縮尺は、遺構の平面図を1/10、断面図を1/20、トレンチ配置図を1/100とした。
- 3 掲載遺物については、実寸トレースで行い、縮尺を1/3とした。

挿図目次

第1図 鞠智城跡全体図	3
第2図 門礎石実測図（第1次）	7
第3図 深迫の地形（第1次）	8
第4図 深迫トレンチ配置図（第3次）	9
第5図 C・G・Eトレンチ断面図（第3次）	10
第6図 Cトレンチ平面・断面図（第3次）	10
第7図 周辺地形図（第16次）	12
第8図 調査区図（第16次）	13
第9図 南側法面（第16次）	14
第10図 南側法面版築状況（第16次）	15
第11図 北側法面（第16次）	16
第12図 北側法面版築状況（第16次）	17
第13図 集石①・楕円形状の掘り込み実測図（第16次）	18
第14図 掘形・集石②実測図（第16次）	19
第15図 トレンチ配置図	22
第16図 28-2トレンチ土層断面図	23
第17図 南土壙裾部石敷き状況	24
第18図 28-8トレンチ北壁土層断面	25
第19図 28-4トレンチ平・断面図	27～28
第20図 28-5トレンチ西壁土層断面図	30
第21図 遺構配置図	32
第22図 池の尾門跡	33～34
第23図 須恵器	35
第24図 土師器	36
第25図 瓦	37
第26図 南側土壙線西端部の土壙	43
第27図 西側土壙線北端部の土壙	44

表目次

第1表 遺物観察表①	40
第2表 遺物観察表②	40
第3表 遺物観察表③	41

図版目次

図版1 深迫門跡調査区全景（真上から）
図版2 深迫門跡調査区近景（真上から）
図版3 深迫門跡調査区全景（東から）
図版4 深迫門跡調査区近景（西から）
図版5 28-2トレンチ（北から）
28-2トレンチ（西から）
図版6 南土壙前面及び石敷き検出状況（北東から）
南土壙石敷き検出状況①（北東から）
図版7 南土壙石敷き検出状況②（北東から）
南土壙石敷き検出状況③（南から）
図版8 28-4トレンチ①（南から）
28-4トレンチ②（南から）
図版9 28-4トレンチ③（北から）
28-5トレンチ①（東から）
図版10 28-5トレンチ②（北から）
28-5トレンチ③（北東から）

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の経緯と組織

1 調査の経緯

鞠智城跡における発掘調査は、当時熊本女子大学教授であった乙益重隆氏を調査団長とする「鞠智城調査団」による、昭和42～44年度に実施した第1～4次調査に始まる。それ以降、鞠智城跡の全容解明に向けた発掘調査を、一部空白期間はあるものの、文化庁国庫補助事業としてほぼ継続的に実施してきた。

これまで行われてきた第27次にわたる調査により、古代山城である鞠智城の姿を明らかにするための成果を得ることができている。国内の古代山城では類例をみない八角形建物跡をはじめとする72棟分の建物遺構、5,300m²という広大な規模をもつ貯水池跡、版築盛土の土壘、そして暗渠通水溝を伴う水門など、貴重なデータが蓄積されている。このように、継続した発掘調査は、鞠智城の構造解明を確実に進め、古代の山城を理解するうえでの重要な史料となっている。これらの調査成果に加え、平成16年2月27日付けで国指定史跡「鞠智城跡」となり、全国有数の遺跡として周知されるに至っている。

現在の発掘調査は、平成6年度から始まった鞠智城跡の歴史公園化に向けた鞠智城跡整備事業のなか、歴史公園の完成を目指した『第2次鞠智城跡保存整備基本計画』（平成14年4月策定）に基づき進めている。当計画には鞠智城跡の全容解明に向けた取り組みとして発掘調査及び調査・研究の基本方針及びそれに基づく平成23年度までの年次計画が掲げられた。なかでも発掘調査では、①貯水池跡、②城門跡、③土壘線の構造解明という、3本の調査方針のもと年次計画が立てられている。

第28次となる本年度の調査では、鞠智城の南東の門である深迫門跡を中心に実施する。この深迫門跡における調査は、昭和42年に実施された第1次調査、昭和43年に実施された第3次調査、平成6年度に実施された第16次調査と3回行われており、特に、前回の第16次調査においては、遮蔽構造としての版築土壘の存在が明らかとなっている。本年度の調査ではこれまでの調査成果を踏まえ、「長者どんの的石」として永くこの場所に残っている深迫門礎石の原位置を明らかにして、さらに深迫門跡の構造を解明することを大きな目的として実施した。

2 調査の組織

1) 発掘調査

調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者 大田幸博（熊本県立装飾古墳館長）

調査総括	木崎 康弘 (同副館長 兼歴史公園鞠智城・温故創生館長)
調査事務	松川晋二 (同文化財整備交流課長)
	小佐井栄一 (同主任主事)
調査担当	矢野裕介 (同主任学芸員、主査)
	長尾至明 (同文化財保護主事)
	前川真由美 (同嘱託、平成18年9月～平成19年3月)
調査指導	河原純之 (元千葉大学教授)
	岡田茂弘 (国立歴史民俗博物館名誉教授)
	小田富士雄 (福岡大学名誉教授)
	安原啓示 (元文化庁主任調査官)
	坂上康俊 (九州大学大学院人文科学院教授)
	板楠和子 (九州ルーテル学院大学教授)
	小西龍三郎 (元九州造形短期大学デザイン科教授)
	亀田修一 (岡山理科大学教授)
	西谷正 (九州大学名誉教授)
	出宮徳尚 (岡山市教育委員会生涯学習部文化財専門監)
	乗岡実 (岡山市企画局文化政策課博物館副専門監)

以上、順不同、敬称略

調査協力	山鹿市教育委員会 菊池市教育委員会 山鹿市菊鹿町米原区 菊池市堀切区
------	---

2) 報告書作成	
責任者	大田幸博 (熊本県立装飾古墳館長)
総括	木崎康弘 (同副館長 兼歴史公園鞠智城・温故創生館長)
担当	矢野裕介 (同主任学芸員、主査)
	長尾至明 (同文化財保護主事)
	大村ひかり (同嘱託)
	前川真由美 (同嘱託、平成18年9月～平成19年3月)



鞠智城跡パンフレット(発行:平成9年7月)に追記

第1図 鞠智城跡全体図

第2節 調査の方法と経過

1 調査の対象

今回の第28次調査は、池の尾門跡、深迫門跡及びその北側尾根、馬こかしの石垣と、3つの調査区を対象とした。前述のように、これらの地区では、これまでに幾度かの発掘調査が行われている。そのため、それらの調査成果を踏まえたうえで本年度の調査を実施していく必要があった。以下、各調査区のなかで、どのようなことをめざして調査をするかについて整理しておく。

池の尾門跡においては、第26次、第27次調査で検出した遺構を対象とする。特に通水溝については、その構造解明及び排水口の確定を目的として調査を実施していくこととした。

深迫門跡及びその北側尾根においては、第1次、第3次調査の成果を受けて実施した第16次調査における調査範囲を対象とする。まだ解明されていない深迫門礎石の原位置の確定をめざしていくこととした。さらに、これまでにはまだ存在が確認できていない北側尾根部分の外郭構造の把握も目的のひとつとした。

馬こかしの石垣においては、第1次調査で明らかにすることができなかった石垣の築造年代の把握を目的とした。

2 調査の方法

3つの調査区、それぞれにおける具体的な調査の方法は次の通りである。

1) 池の尾門跡

- ・ 第27次調査において検出した遺構の実測を実施し、遺構図を作成する。
- ・ 通水溝の構造を把握するために、溝の蓋石のうち、原位置を保っていない1～2石を外し、溝の内部を精査する。
- ・ 通水溝の総延長を把握するために、通水口の位置を調べていく。

2) 深迫門跡及びその北側尾根

- ・ 第16次調査区の全面露出及び精査を行い、調査成果を検証する。
- ・ 第16次調査において、門礎石の原位置を推定した谷頭にあたる平坦面を調査する。
- ・ 北側尾根の構造を解明するために、数箇所のトレンチ調査を実施する。

3) 馬こかしの石垣

- ・ 石垣の実測により、構造的特徴を把握する。
- ・ 基底部において遺物等を調査するなどして、築造年代を推定する。

3 調査の経過

第28次調査は、平成18年8月22日から平成19年3月30日までの期間である。

まず、池の尾門跡の調査地区に入った。昨年度の第27次調査に検出された通水溝を構成する石や石墨であったと推定された石群の清掃等を行った。ただ、現状変更の許可が下りておらず、掘削ができず本格的に調査に入ることができなかつたため、池の尾門跡及び深迫門跡の除草作業を中心に行つた。

深迫門跡は、第16次調査以降に定期的な除草作業が行われてきていたが、今回の調査区内も草が繁茂している状況だった。そのため、9月初めに調査に入るための除草作業を行つた。同時に、前回の調査終了時に被覆してあったビニールシートも撤去した。

まずは、これまでの調査成果を確認することが必要であったため、調査区内を前回調査の面をはつきりと露出させる作業を進めた。その後、堆積した土の除去と繁茂した草の根の除去を丁寧に進めていった。残暑の日差しがとても厳しかつたため、乾燥の早い深迫門跡の土に水をかけながらの作業となつた。

確認作業は、第16次調査報告書の主に第16図に基づいて行った。土壘においては、第16次報告書第8～13図に基づき、北側法面2段目、3段目、4段目の法面において版築状況の確認、南側法面2段目、3段目、4段目の法面と平面において、残存する版築状況の確認を行つた。平面においては第16次報告書第16図を基に確認作業を進めた。また、集石①、集石②の残存状況の確認、さらに4段目の南縁に東西方向で並ぶ6つの方形掘形の確認、4つの土坑の確認等を行つた。

各段の露頭では明確に確認できる版築土壘も、平面ではその範囲を明確に把握することは非常に困難であった。特に3段目から4段目にかけての、褐色土を中心とし、にぶい黄褐色土や浅黄橙色土、ブロック状の黒褐色土等が混在した土については、版築盛土であるかそうでないかの判断が困難であった。調査区全体を何度も精査したが、版築土壘の範囲を平面で把握することができなかつた。

調査が難航したため、門内の登城道等を確認することで、門礎石の位置を把握できないかと考えた。谷頭の平坦面は、門礎石原位置と推定されてもいるため、この面において28-1トレンチを設定した。

しかし、掘削を進めるなかで、遺構面まではかなり深度があると判断したため、1段目に28-2トレンチを設定した。ここでも明確な遺構面は確認できなかつた。

そのような状況のなか、10月13日に岡山理科大学の亀田修一教授を招き専門指導を受けた。4段目南縁に並ぶ6つの方形の堀形、その堀形と同じ方向に面を合わせて配置されたような集石②における2つの石等を改めて見直していった。柱穴を伴う2つを含む6つの堀形は版築土壘築造時の矢板を留める柱跡であり、面を合わせたような2石は土壘の基礎となる石列の一部であると考えることができた。そこで、それらの方向に版築土壘の前面があるとの想定をもとに、調査することとした。また、通路を挟んで南北に2つの土壘

が所在し、南側の土壘を「南土壘」、北側の土壘を「北土壘」と名称を付した。

まず、南土壘側の集石②の側の土坑SK04を断ち割るような形で28-3トレンチを設定した。ここでは土壘壁前面と敷石等を確認した。また、対応する北土壘についても28-4トレンチを設定し、ここでも土壘前面と敷石また、柱穴らしき遺構も検出した。版築土壘の範囲をさらに詳細に把握し、門礎石の原位置を解明するべく、28-5トレンチを設定し調査を継続した。

その後も、深迫門礎石の原位置の解明をめざして、発掘調査を年度末まで進めているが、第28次の調査報告書への掲載内容は以上とする。なお、難航した深迫門跡の調査を継続する必要があったため、当初予定していた馬こかしの石垣の調査には入ることができなかつたが、次年度当初にも実施したい。

第3節 深迫門跡について

1 深迫門跡とは

鞠智城跡には、門礎石の所在から、深迫、堀切、池の尾の3箇所に門跡が比定されている。北側の谷部にも、その周辺地形から門が想定される箇所があり、それを合わせると、計4箇所となる。そのうちの一つ、深迫門跡の門礎石は、「長者どんの的石」として古くから知られていた。鞠智城跡が立地する山鹿市菊鹿町米原には、「米原長者伝説」が語り継がれており、「長者どんの御金蔵」「長者どんの足形石」など、長者伝説にちなんだ場所や大石が所在するが、深迫門礎石の場合、門扉の軸摺り穴が上に露出し、下は半分地中に埋まり、弓矢の的に似ていることから名づけられたものである。

また、深迫門礎石は、昭和初期の所在地考証の過程でも登場する。基肄城跡の研究者、久保山善映氏や松尾禎作氏らが、米原の遺構を踏査して、「長者どんの的石」が朝鮮式山城の門礎石であることを確認した。このように、深迫門礎石は、古くから認識された遺構であったため、炭化米を多く出土する「長者山礎石群」と並んで、昭和34年には「伝鞠智城跡」として県指定史跡となった。昭和51年には「鞠智城跡」と名称が変更されるなど、深迫門礎石は、鞠智城跡を代表する遺構といえる。

2 位置と地形

深迫門跡は、城域の南を限る外郭線が、その東端で北に向きを変える地点に位置し、城域の南東隅に当たる。東方向に開口する浅谷の谷頭近くにあり、そのすぐ西（城内側）に、池の尾に通じる谷の始点がある。東に対する眺望は良く、6世紀後半に築造された装飾古墳、袈裟尾高塚古墳を眺めることができ、さらに、遠くは阿蘇外輪山の頂が見渡せる。

門礎石の上段、南から西にかけては平地となり、さらに南には、阿蘇熔結凝灰岩の侵食

作用で生じた岩壁が迫る。その平地縁に外郭線が通るのである。

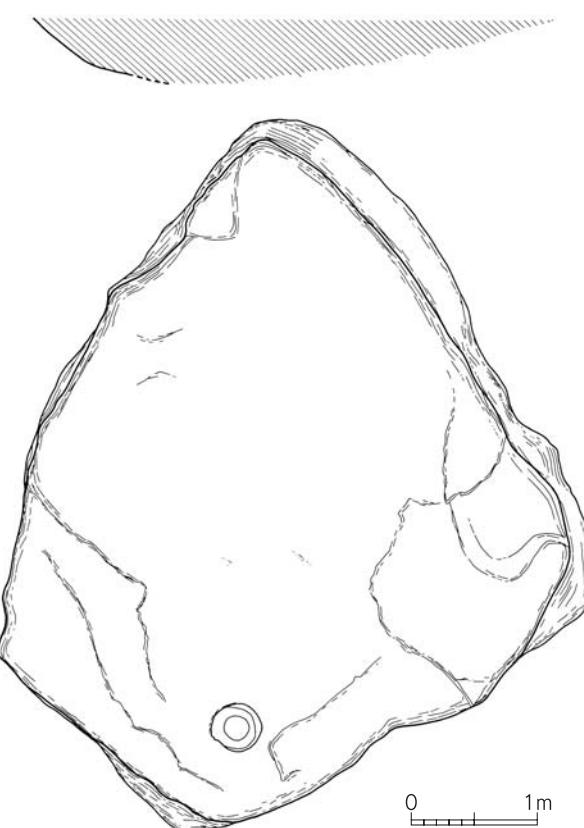
外郭線は、その平地縁から北上し、東に延びる舌状に張り出した痩せ尾根を横切り、深迫門礎石が所在する谷を渡る。谷を渡りきった北側には、一段高い尾根が東西方向に走り、外郭線はそれに取り付くことが想定される。その取り付く先には、尾根を遮るかのような段差があり、外郭線の一角をなすものと思われる。

3 これまでの成果

深迫門跡は、今回の調査の前に、3次の調査が実施してきた。昭和42年度の第1次調査、昭和44年度の第3次調査、そして平成6年度の第16次調査である。このうち、第16次調査では、当時、鞠智城跡では初めてとなる明確な版築土壘が見つかること、画期的な成果を上げている。以下に、それぞれの調査の所見をまとめる。

1) 第1次調査

深迫門礎石が所在する谷部周辺の地形測量(1/200)、門礎石の実測、門礎石の埋没状況の把握を目的としたトレンチ調査を実施している。

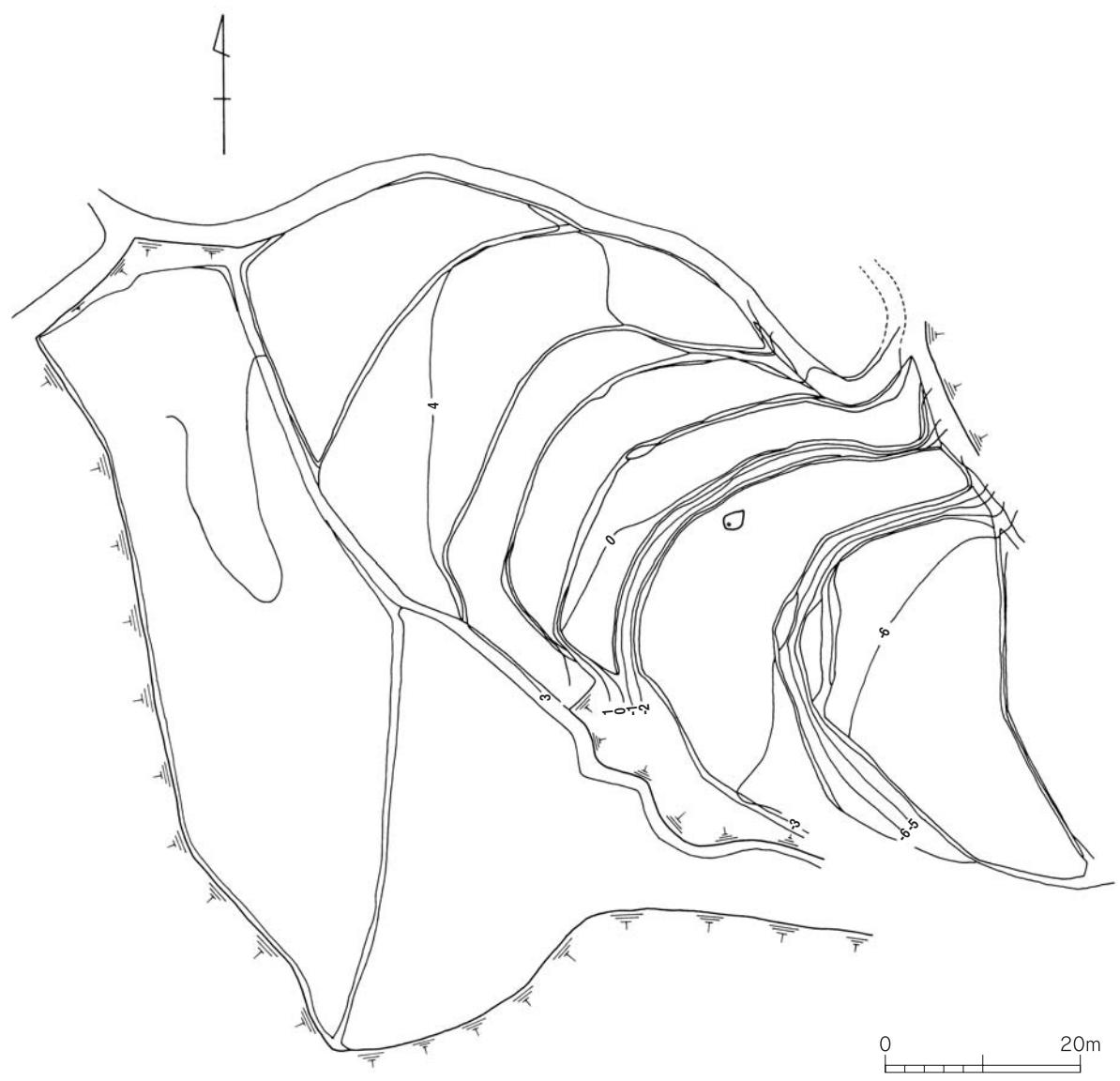


※熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』1983
Fig.8を再トレースしたもの

第2図 門礎石実測図（第1次）

門礎石の原位置については、石の移動目的の穴以外、層序の攪乱が認められなかったこと、門礎石の下位、あるいは同一レベルとなる層から布目瓦片等を採取したこと、門礎石の傾斜が根石を抜き取って持ち起した結果との考え方が合理的であることを理由に、原位置に近いとの見解を提示した。

門礎石の特徴は、形状は長径2.68m、短径2.26m、厚さ約80cm以上を測り、上面は特に加工した痕跡は認められないものの、概ね平滑に仕上げられているとした。さらに、軸摺り穴（長径20cm、短径18cm、深さ14cm）を仔細に観察しており、縁が二段となり完全な同心円でないこと、さらに内部の摩滅痕跡が特に西側が顕著

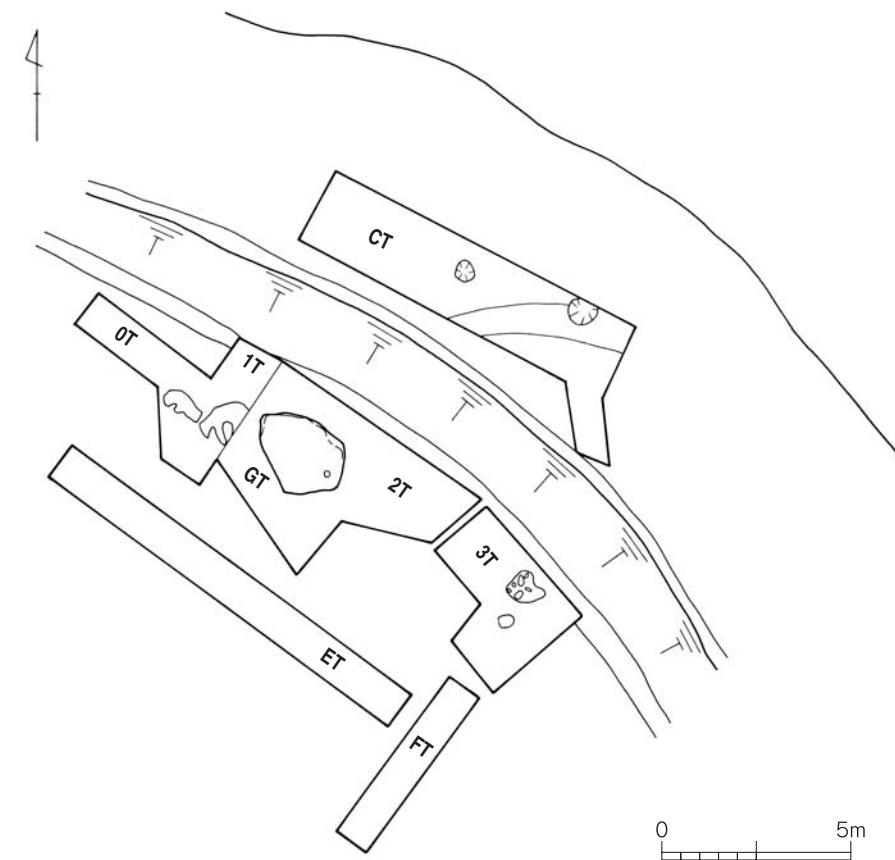


※熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』1983
Fig.7を再トレースしたもの

第3図 深迫の地形（第1次）

に認められることから門扉の回転方向に関連し、後ろに開く「内開」の扉であったことと推測した。なお、堀切門礎石でみられるような、軸受けの機能をもつ鋳鉄の受け皿があつたような痕跡は認められていない。

片袖式の門であったかどうかを確認するため、対称位置に対となる門礎石の有無の把握を目的として、計2箇所（2T、3T）にトレーンチを設定して調査を進め、その結果、軸摺り穴から南へ約5.8mの地点に、礎石の根石群と思しき直径約20cm程の石群を発見している。石質は花崗岩、一石は凝灰岩。周囲と下位には、黒色土が認められ、石を抜いた穴は、長径約1.2mを測るが、上位が削平されているため、さらに大きくなるものと考えられた。



※熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』1983
Fig.18を再トレースしたもの

第4図 深迫トレーンチ配置図（第3次）

この根石群と考えられる石群と門礎石との間に地山である硬質のピンク色の粘土を幅3.6mの間で確認。東西断面は中央部がわずかに高く平坦となり、南北断面は、谷の下方に向かいやや傾斜する。この粘土には長さ20cm、幅12cm程度の礫が食い込み、凝灰岩の細片や、土師質の細片が認められている。

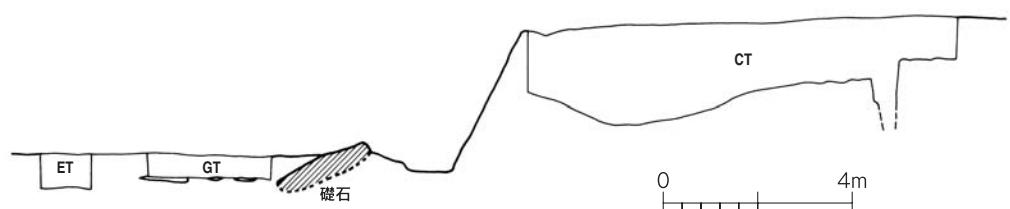
また、地形測量から、当時の道として、急峻な坂道や曲折の復元が為されている。

2) 第3次調査

城外から城門に達する道路（登城道）の検出を目的とした4箇所のトレーンチ調査（C、E～Gトレーンチ）と門跡北側の尾根の構造解明を目的としたトレーンチ調査を実施している。

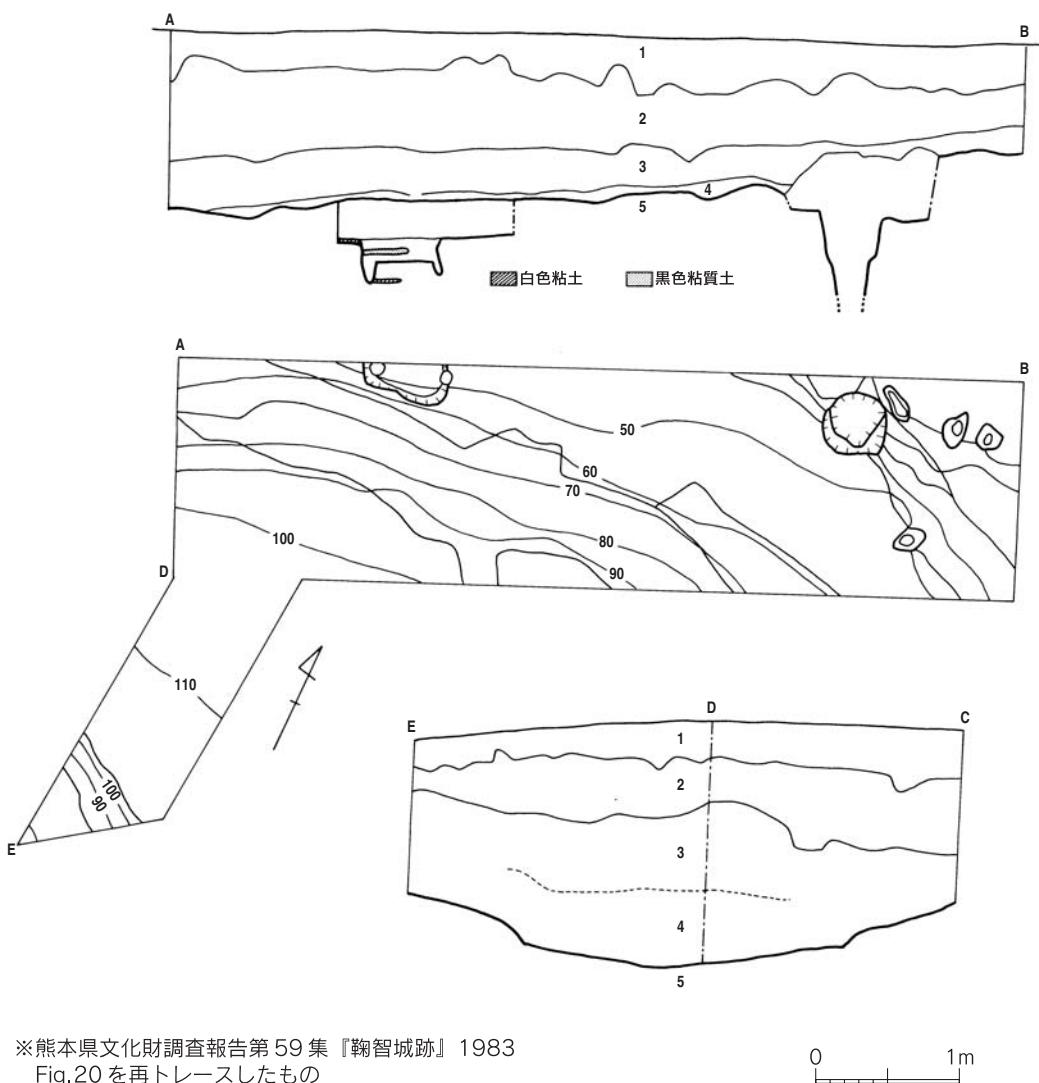
門礎石の東側に設定したEトレーンチでは、その東壁面の土層観察から、地表下20～30cmのところで硬度が増すことが指摘された。この硬度の変化点については、当時の地表面である可能性を示唆した。地表下35cmのところで、刀子片が出土している。

第1次調査時に設定した2トレーンチに接した東西4mのGトレーンチでは、門礎石端より約50cmの地点に黒色粘土と白色粘土が圧延された状況で検出されている。黒色粘土は、



※熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』1983
Fig.19を再トレースしたもの

第5図 C・G・Eトレンチ断面図（第3次）



※熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』1983
Fig.20を再トレースしたもの

第6図 Cトレンチ平面・断面図（第3次）

厚さ5～16cmで非常に硬く、白色粘土は塊状の粘土をたたきつけたような面で硬いことが把握された。白色粘土の下に黒色粘土が認められる部分もあり、版築状を呈しており、門礎石との関連が指摘された。

門礎石が位置する畑地より比高約3.0m上の平坦部に設定したCトレンチでは、地表下70～160cmから土師質土器3片、刀子片1点が出土した。完掘の結果、硬質の赤褐色粘土層（地山）を全面に亘って露出した。また、トレンチ南東隅から約2.8m幅の浅い凹字状の平坦面を検出したが、道路跡の可能性を指摘している。その道路跡想定遺構の北側には、約3.3mの間隔で東西2基のピットを検出している。東側のピットは、径45～46cmの円形を呈し、深さ55cm以上で、深さ35cmのところでくびれてせまくなり、埋土は、軟質の黒褐色土で下位はより粘質となる。ピットの縁の土砂には、白粘土まじりの斑点が混入した。西側のピットは、底部に2基の小形のピットが認められ、白・黒粘土の薄層が互層に堆積し、黒色は硬く、白色は柔らかいことが判明した。これら2つのピットについては、道路の境を示す柱穴の可能性を指摘している。

2) 第16次調査

深迫門礎石が所在する東南東方向に開口する谷頭全域の調査が実施された。調査前の様子は、上から1～3段目まではかなりの荒地で、植林された楮、三叉の低木が繁茂し、門礎石の所在した4段目は畑地で、所々に野菜が植えられた状況であった。

門礎石の原位置については、第1次調査時のトレンチを拡大して再調査を実施している。その結果、門礎石に関連した根固め石や掘り込みの地業穴も無く、斜めになった門礎石は地山に掘られた穴に直に落ち込んでいる事がわかり、その穴の埋土は搅乱土であったことから、門礎石は後世に、今の場所へ運び込まれたものが、その後、耕作のため、半分を地中へ落とし込んだものと結論付けた。さらに、当次で検出された登城道から完全にずれた位置にもあることから、門礎石は原位置ないと判断している。

また、第3次調査時に、門礎石が原位置を保つものとされ、それに対応する門礎石の地業穴とされた土坑（SK01）も、再調査の結果、壁面がオーバーハングし、はつきりした堀形を有しない点、埋土も自然堆積で版築状態に無かつたことから、否定している。

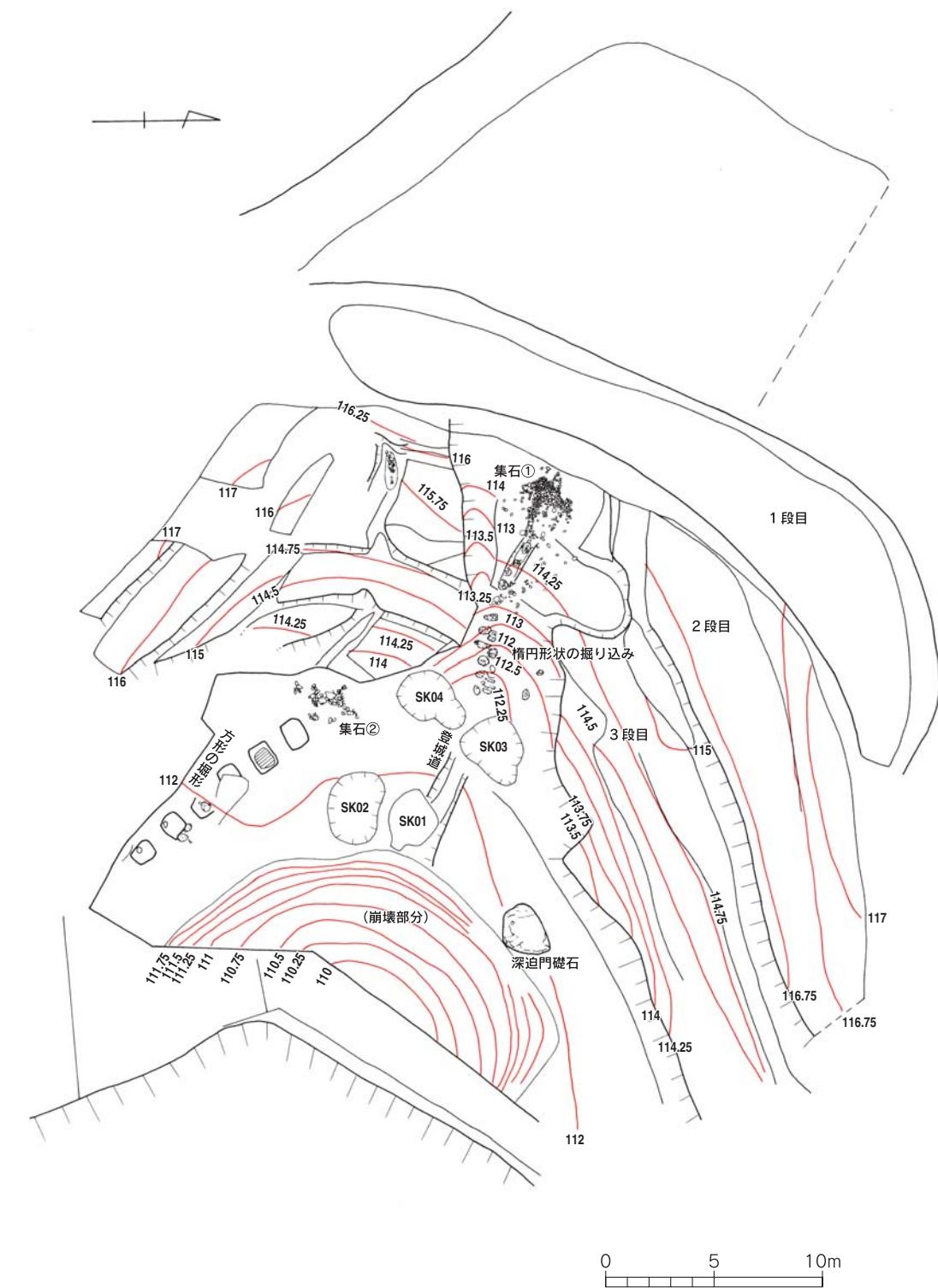
登城道については、一部の検出にとどまったが、直径60cm、幅40cm程の楕円形状の掘り込み穴に円礫が敷き詰められたものが検出され、登城道の敷石と判断されたことから、敷石を伴うことが予想された。調査区の下方から、南側の尾根裾を通る道を想定している。

深迫の谷間で南北両側から積み上げられた版築土壘を検出した。後世に段々畑として造成された関係で段地形を呈し、その2、3、4段目の法面から互層による盛土層が検出されており、谷を狭めるための版築土壘であることが判明した。版築盛土の状況は、下記のとおりとなる。



※熊本県文化財調査報告第152集『鞠智城跡－第16次調査報告－』1998
第15図を再トレースしたもの

第7図 周辺地形図（第16次）



※熊本県文化財調査報告第152集『鞠智城跡－第16次調査報告－』1995
第16図を再トレースしたもの

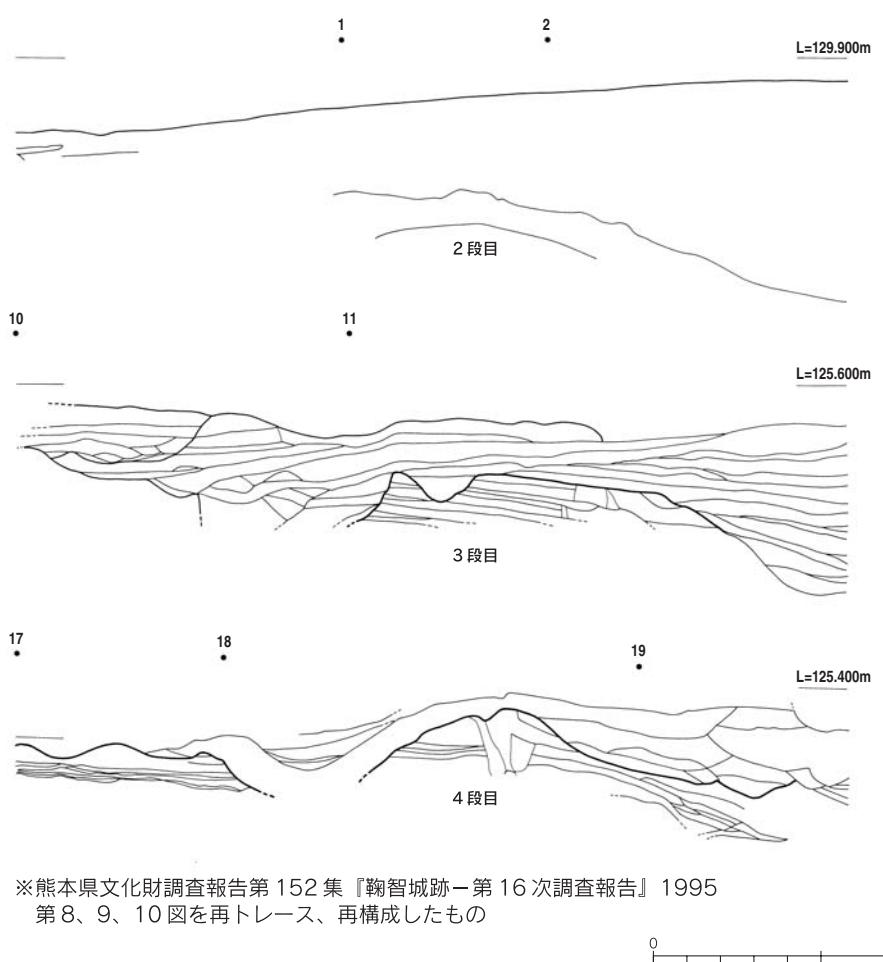
第8図 調査区図(第16次)

[北側法面]

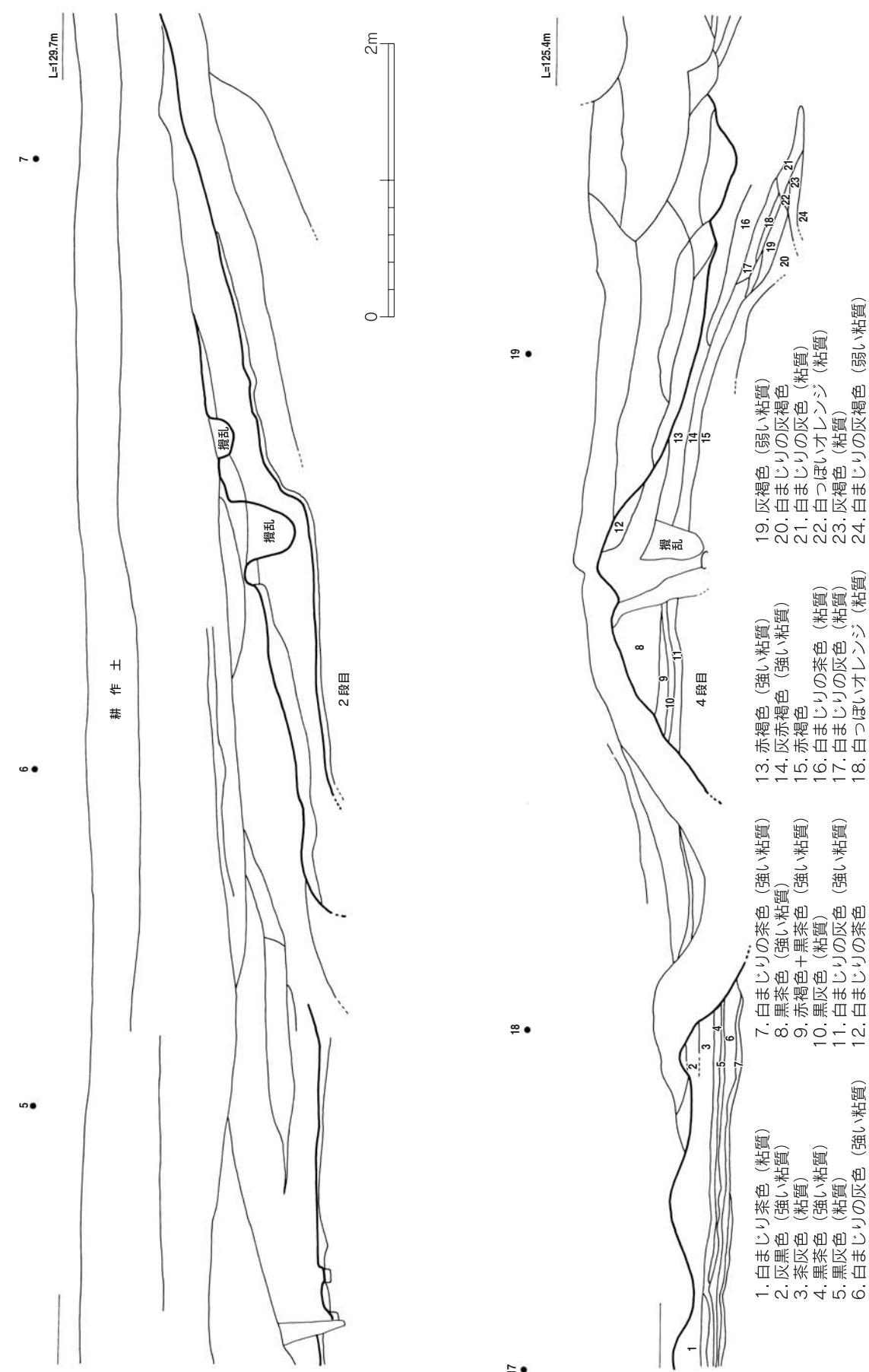
2段目においては、基底部近くに茶褐色土を強く叩き締めた層を検出しており、叩き締めの状況から土壘の基底を為す層と判断された。3段目においては、20～30層の盛土層が検出された。個々の層は、層厚10cmも満たない細層でローム土をベースとしており、茶白色、灰茶色、橙褐色、黒茶色など多色に及び、強く叩き締められている状況が看取された。また、土壘の北東端から8.9m南西の地点に、ヒビ割れのような縦位の細線が認められた。4段目においては、オリーブ色を基調とする盛土が検出されたが、はつきりとした分層はできず、全体的にまだら模様となる。

[南側法面]

3段目の法面から、黒色と茶色のローム層土の盛土を検出し、4段目の法面においては、通路側と山側において盛土の土質が異なる。通路側は黑色土と灰色土を基調とするのに対して、縦線を境とした山側は茶色ローム層土を基調とする盛土となる。

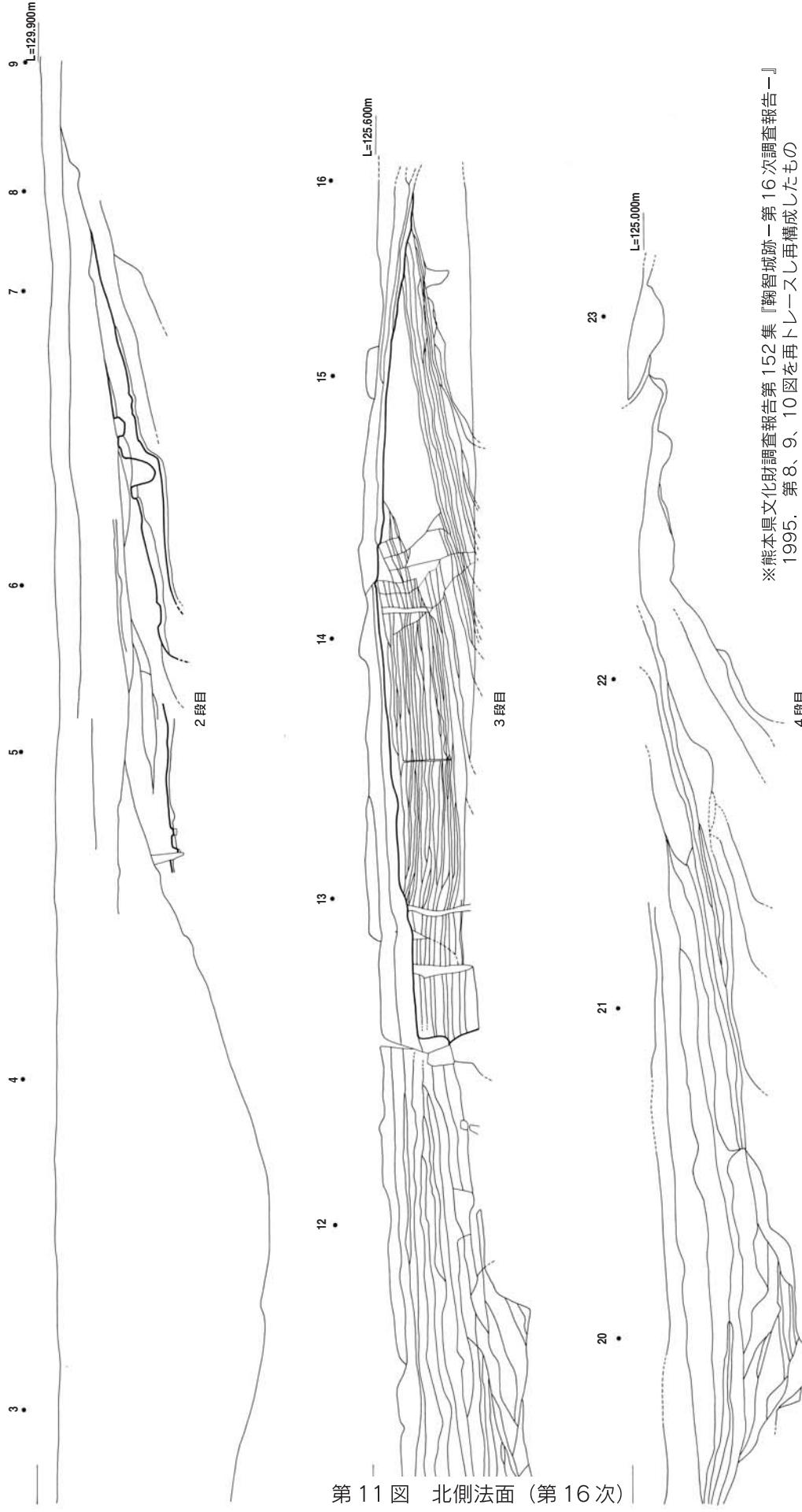


第9図 南側法面（第16次）



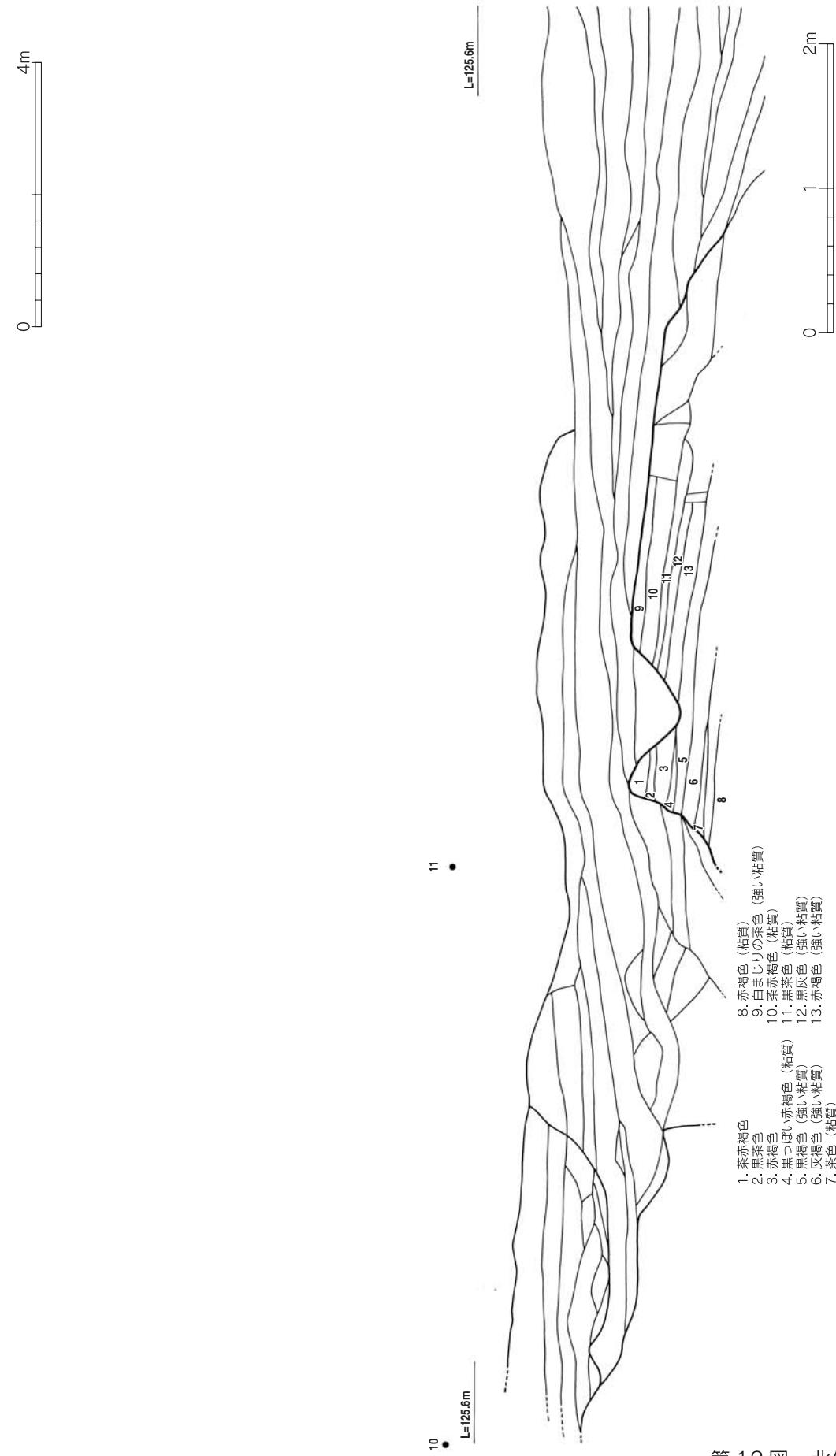
第10図 南側法面版築状況（第16次）

※熊本県文化財調査報告第152集『鞠智城跡－第16次調査報告』1995
第11、12図を再トレース、再構成したもの



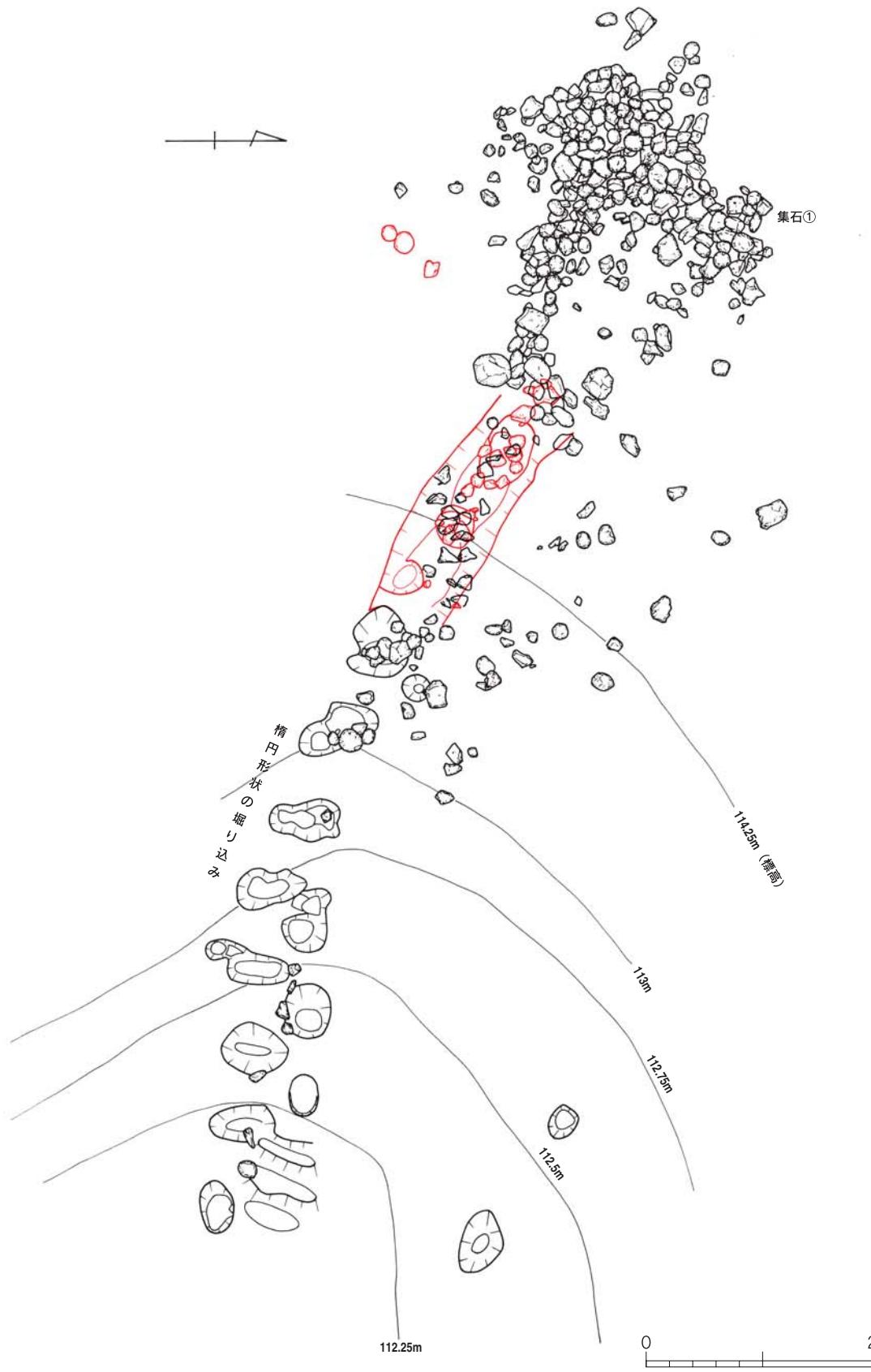
第11図 北側法面（第16次）

※熊本県文化財調査報告第152集『鞠智城跡－第一16次調査報告－』
1995. 第8、9、10図を再トレスし再構成したもの



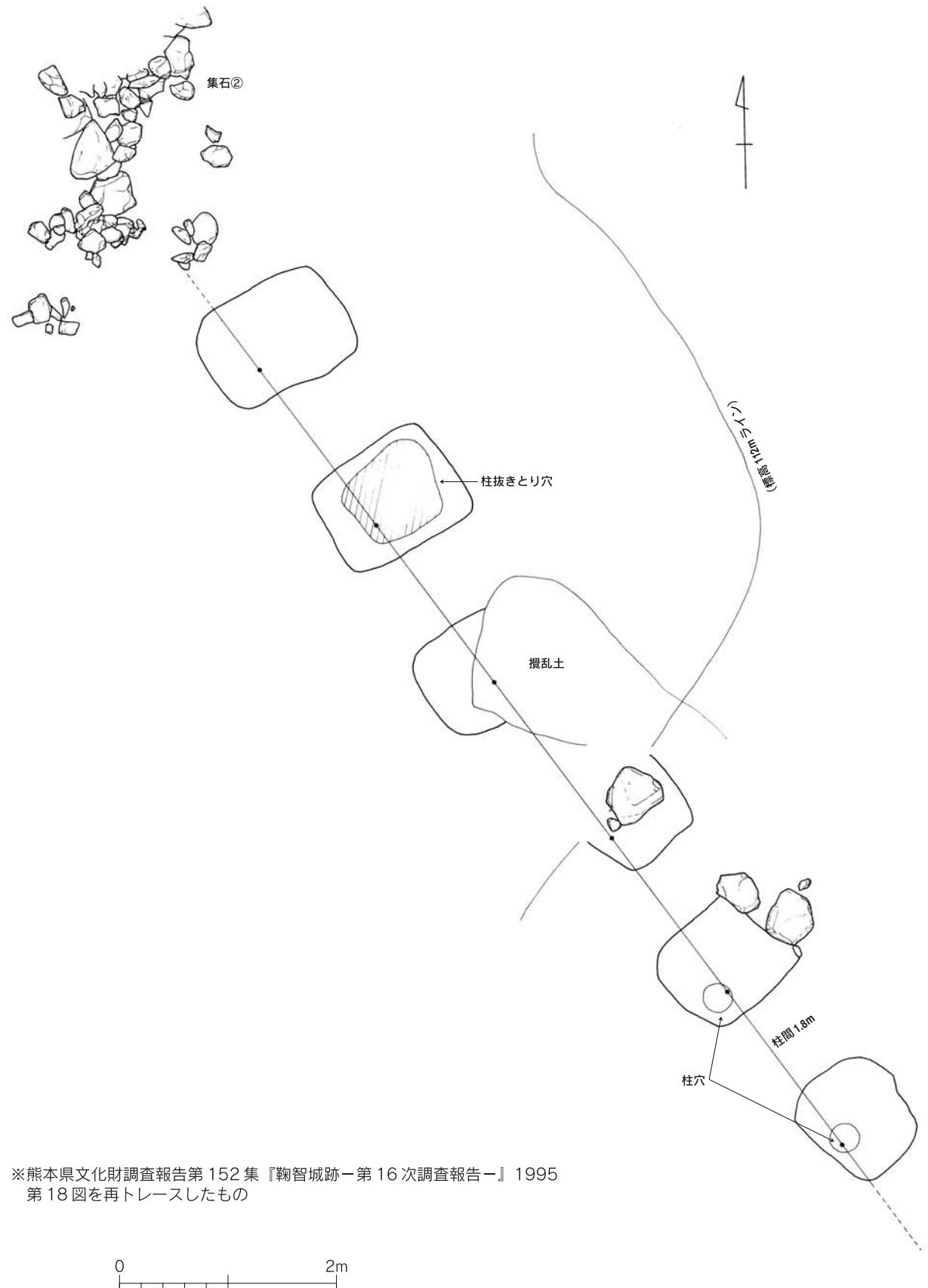
第12図 北側法面版築状況（第16次）

*熊本県文化財調査報告第152集「鞠智城跡－第16次調査報告－」1995
第13図を再トレスしたもの



※熊本県文化財調査報告第152集『鞠智城跡－第16次調査報告－』1995
第17図を再トレースしたもの

第13図 集石①・楕円形状掘り込み実測図（第16次）



※熊本県文化財調査報告第152集『鞠智城跡－第16次調査報告－』1995
第18図を再トレースしたもの

第14図 堀形・集石②実測図（第16次）

全体的には、版築盛土の層厚は地形に即した形で、谷間の斜面中央部が最も厚くなっていることが認められた。盛土のズレについては、上下からの圧力によるものとし、地震で生じた断層の可能性を示唆している。

また、谷部の南側から方形状の掘形6基が検出された。うち2基には柱穴を伴っており、柱間間隔は1.8mとなった。版築土壘の裾部に位置し、登城道の南縁に並ぶ杭列との解釈が与えられた。

また、登城道周囲の4基の土坑（SK01～04）の調査では、いずれも門礎石の地業穴との判断には至らなかった。しかし、そのうちSK04の埋土の底部（層厚20～30cm下）から割り石列が検出され、版築土壘の下層部の割り石列とした。

結果的に、門礎石の原位置の確定はできず調査を終えているが、調査区の上位、地形の変化点となる谷頭あたりが候補地として挙げられた。

第II章 調査の成果

第1節 深迫門跡の調査

1 各トレンチの成果について

今回の深迫門跡における調査の目的である門礎石の原位置の解明、そのための版築土壘の範囲確認を念頭に、トレンチ数本による調査を行った。以下、現段階での調査成果を記述する。

1) 28-1トレンチ

①トレンチの設定

深迫門跡がある谷の谷頭付近、北土壘の上方にあたる場所に位置する三日月の形をした平坦面がある。本トレンチは、この場所に約20m×8mの範囲で設定したものである。この地点は、門構造から考えてすでに城内に入っていることが推定されるため、登城道の痕跡を調査すること、また北土壘の範囲を平面で確認すること、の2つを目的として本トレンチを設定した。

②成果

30cm程の表土を掘削すると中世の遺物を含む層が続き、その深度はかなり深いため現段階でこの地点の状況を明確に把握することはできない。

2) 28-2トレンチ

①トレンチの設定

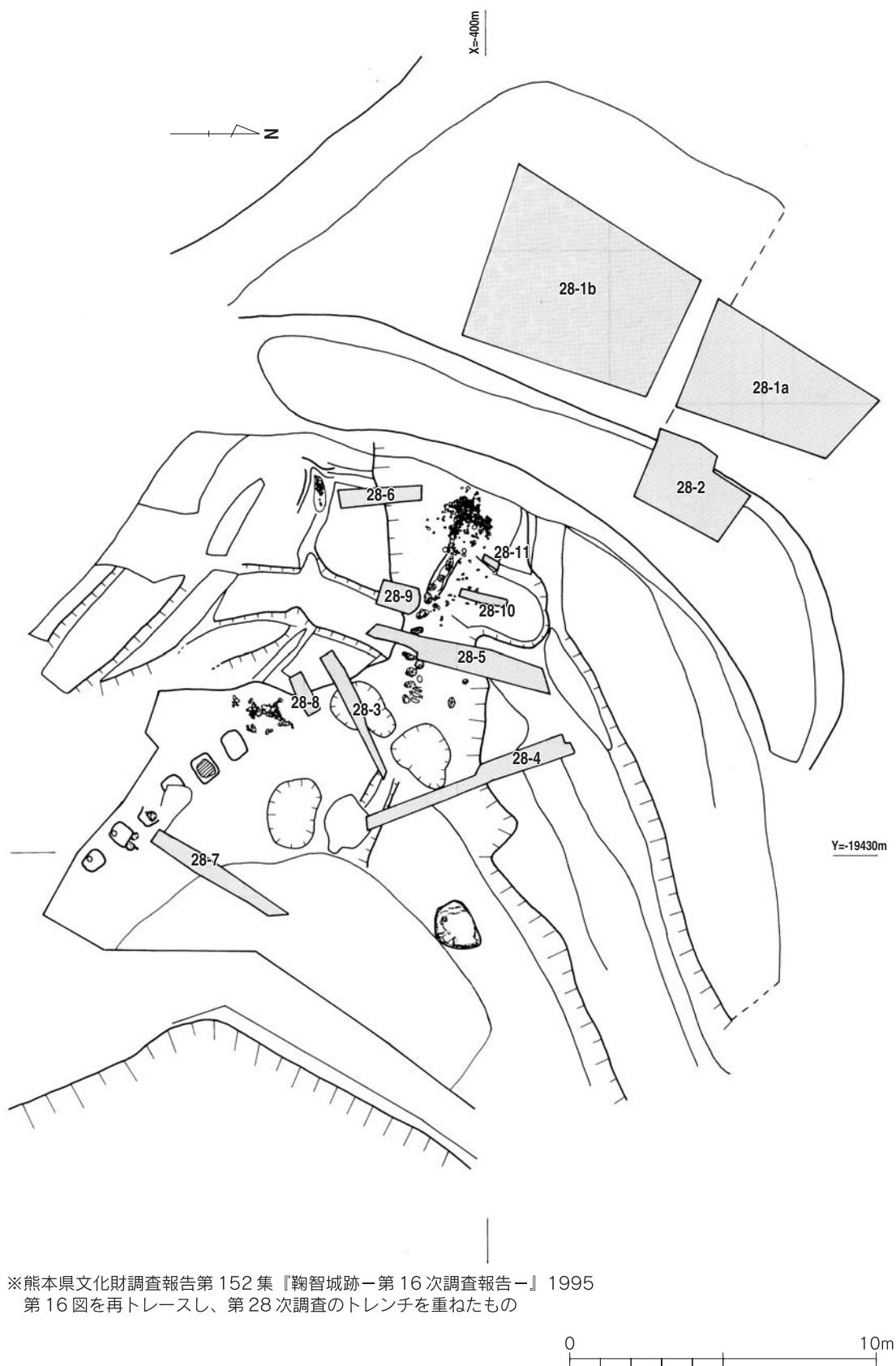
北土壘側の1段目にあたるこの地点は最も広い部分が幅約3m程度の狭く細長い土地である。この土地は、第16次調査において法面にも版築土壘が確認されている2段目と28-1トレンチを設定した平地との間に位置する。

ここでは、28-1トレンチにおいて確認できていない深さの続きをレベルを下げて確認すること、また、2段目とのつながりにおいて土壘の範囲を確認すること、これら2つの目的をもって、約5m×約4mの本トレンチを設定した。

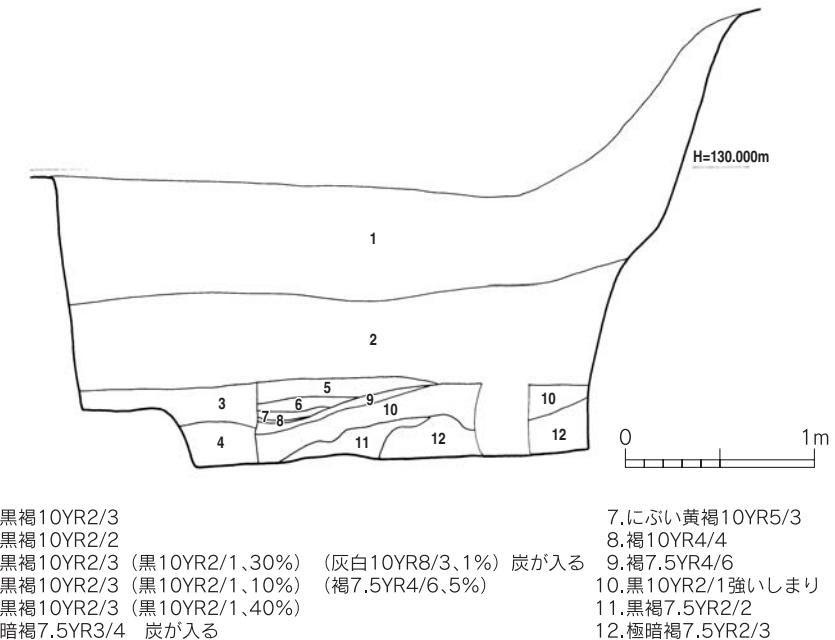
②成果（第16図）

1段目のトレンチ断面につながる形の本トレンチ南側断面においては、版築土壘と考えられる土を確認した。耕作土及び中世の遺物を含む層の下で、当時の遺構面と考える黒色土の上面となる。

城外に向けて緩やかに傾斜する黒色土の平坦面に合わせるように、3～4層に水平に積まれた土が版築土壘の一部と考えられる。また、他の土により切られている部分もあるが、



第15図 トレンチ配置図



第16図 28-2 トレンチ土層断面図

その先にも同じ土が続いている。この版築土の層は、北土壙側の2段目法面に露出する版築土壙部につながると考えられる。

このことは、後述する28-4トレンチで検出した北土壙の基部を前面とする土壙の平面的な広がりを知るうえで重要である。ただ、本トレンチ南側断面で検出した、北土壙の最も城内側のこの部分付近においては、何らかの遺構の存在が考えられる。その点については十分に検証するには至っていない。

3) 28-3, 8 トレンチ

① トレンチの設定

第16次調査で、「集石②」と把握された集石を観察したところ、西側の約30cm大の平石2石(A・B)が東側に面を揃えた状況で並列し、さらにその東側にそれに平行して6基の柱掘形が並んでいる状況が認められたため、その2石を土壙裾部の石列で、柱掘形は土壙を構築する際の支柱穴であるとの想定をした。さらに、亀田修一氏の現地指導により「集石②」の2石の石列の前面にも6基に連続する柱掘形1基が把握されたことにより、2石は土壙裾部の土留めのために置かれた石列であることがより確実なものとなった。ただ、その集石が2～3段の石積みが崩落した姿かどうかは把握できない状況であった。

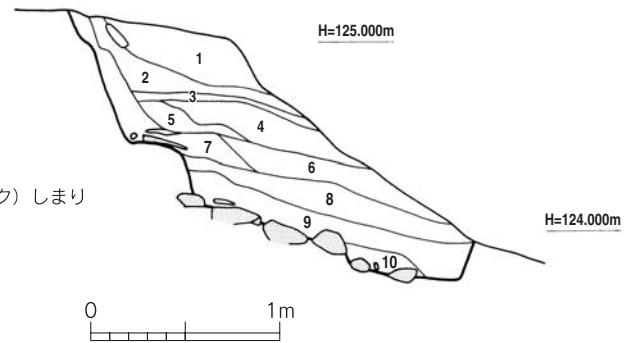
また、その上段を精査したところ、ちょうど石列と平行して内側に黒褐色土と外側ににぶい黄褐色土の境界が確認された。このことから、黒褐色土の基底部に石列が存在するとの想定のもと、にぶい黄褐色土を断ち割り、石列とさらにその下方の土層堆積を把握する



第17図 南土墨裾部石敷き状況



1. 暗褐 10YR5/4
2. にぶい黄褐 10YR 5/4
3. 黒褐 10YR2/3
4. にぶい黄褐 10YR5/4 (明赤褐 5YR5/6、5%)
(黒褐 10YR2/3 ブロック) しまり
5. 褐 10YR4/4 炭が入る
6. にぶい黄褐 10YR 5/4
7. 褐 7.5YR4/4
8. 黒褐 10YR2/3 (黒 10YR2/1 ブロック一部)
9. 黒褐 10YR2/2
10. 暗褐 7.5YR3/4



第18図 28-8 トレンチ北壁土層断面図

ことを目的として、幅 70cm、長さ 6.6m の 28-3 トレンチを設定した。なお、当該トレンチは第 16 次の SK04 の西側壁面を断ち割るトレンチであり、当該壁面には赤褐色を基調とする版築盛土が把握されていた。

28-7 トレンチも同様の目的で幅 70cm、長さ 2.1m の範囲で設定したが、後述する 28-3 トレンチで検出された土層とやや石列より高いレベルにある連続しない石が当該トレンチでも確認されるかどうかを目的とするものであった。

②成果（第17図、第18図）

黒褐色土を基調とする土壘の裾部において、半分盛土に埋まった形で石列を検出した。当初から露出していた 2 石の石列に連続すると考えられる。28-5、8 トレンチ双方で 2 石ずつ検出され、20～30cm 大の平石を使用していた。石材はいずれも安山岩系の石材で、やや前面を揃えるような意識のもと整然と並べられていた。石積みではなく、1 段で構成され、その上に、黒褐色、浅黄橙土の互層盛土が確認された。石列の上にも下の石列に連続しない間隔を空けた石の並びが確認されたが意味合いは不明である。

さらに石列前面には、土壘裾部に平行する約 1.2m 幅の帯状の石敷きを確認した。外に向かい約 16 度でやや下傾する。10～30cm 大の安山岩系の石材を主に使用しており、一部に軽石も使用していた。石敷きの前面は不揃いで、ある程度隙間ない状況で置かれていたが、上面の面を揃えるような意識は認められない。

石敷きの上面には比較的硬化した約 12～16cm 厚の黒褐色の砂質土（第18図 8・9）が把握され、その上ににぶい黄褐色を基調とする土層（第18図 2～6）が認められた。このにぶい黄褐色の土層は第 16 次調査の際、盛土として把握されており、今回の調査でも、かなりしまりのある土層であることが把握され、人為的な盛土であることがほぼ確実となった。盛土が土壘本体の構築後、一定期間経過した後に為されたものか、あるいは直後に

土壘本体と一体的に為されたものは判然としないが、石敷き自体、上述の理由から見せるための意識が認められず、盛土の時期も後者の可能性が高い。また、新たに見つかった柱掘形の上面には、1石認められるものの、その周辺の散石状況を見ても石敷きがあつたような痕跡はないように思える。

4) 28-4 トレンチ

①トレンチの設定

28-3 トレンチを設定した後、対応する北土壘においても土壘の方向及び範囲を確認するためのトレンチを設定した。

この北土壘としている部分は、第16次調査による調査区、谷の北側斜面部にあたる。背後は北側尾根であり、その尾根につながる急勾配な地山に土壘がとりつく形となっている。第16次調査において、2段目法面から2段目、3段目、4段目法面まで版築土壘の範囲とされており、特に3段目法面には版築土の積み上げ状況が明確に確認できる。

本調査では、3段目の平面を幾度となく精査したが、3段目法面で見られる版築土が混ざったような土であったため確認できていなかった。そこで、3段目法面におよそ直交する向きに幅60cm×長さ2.5mのトレンチを設定、その後幅1.1m×長さ8mに拡大した。

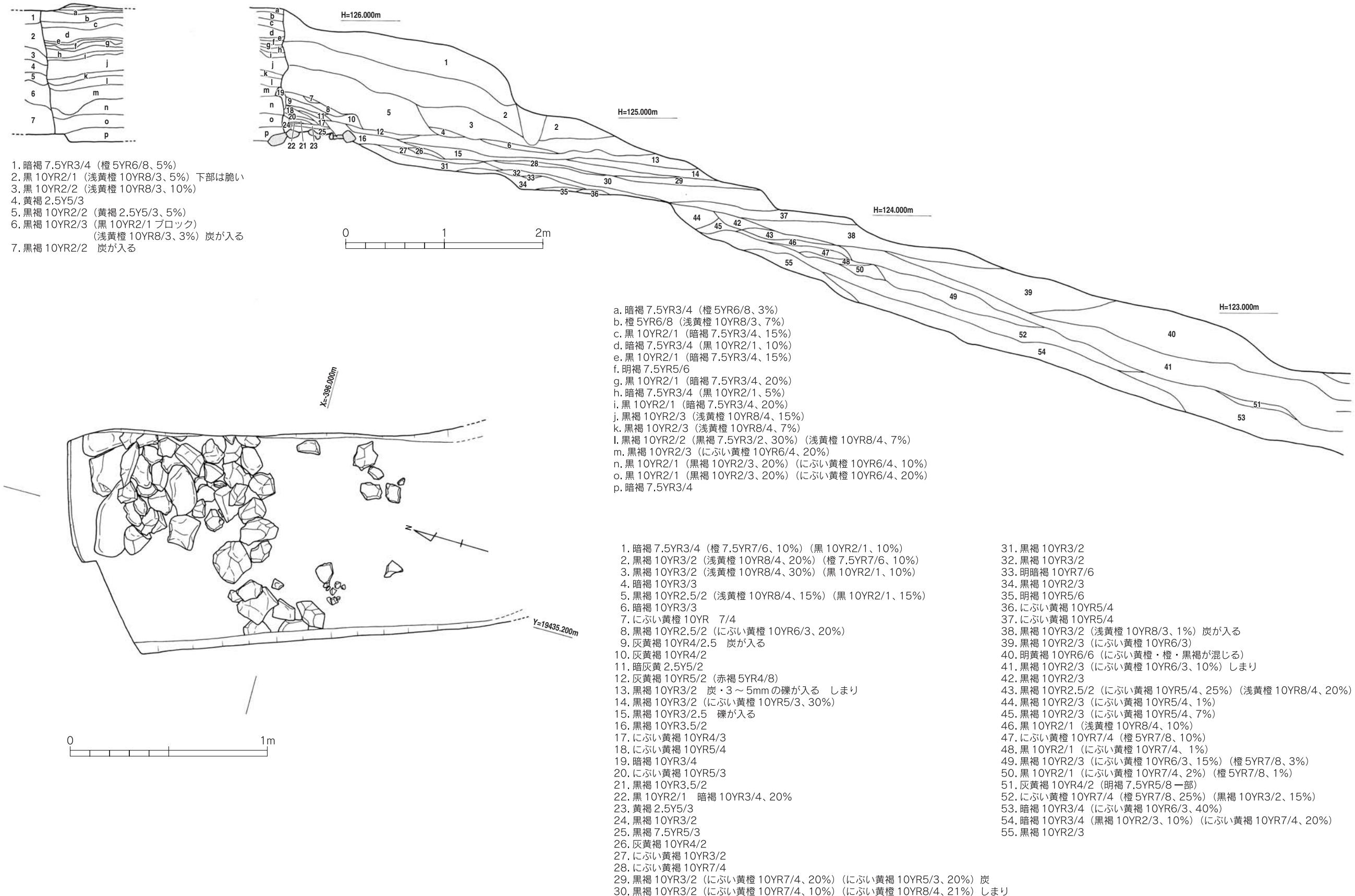
②成果（第19図）

本トレンチにはほぼ直交する形で、版築土壘の前面を明確にとらえることができた。壁の前面は平滑ではないが、上からの叩き締めのためかなり硬化している。また、その壁面に入り込んだ形の柱痕跡の存在も明らかとなった。

土壘の前面の直下には、28-3 トレンチで確認したものと同様の石列がある。石列は露出部で確認する限り最大35cmの長径であり、土壘前面から奥に向けて17cm入っている。その石列の上、土壘前面に接する部分から城外に向かって80cmの幅、浅い傾斜で石敷きが存在する。ただ、柱痕跡の前には石敷きは見られなかった。

本トレンチの断面では、石敷きから城外に向けた平坦面の存在を確認した。石敷きの先端部から5m、締まりのある土層が続く。その平坦面の先からは、約30°の角度で急激に傾斜している。地山の上層には灰黄色土等を含んだ層が地山の向きに沿って存在するようだ。石敷き上部には、粘質の薄い層を含む数層がある。28-3 トレンチにおける南土壘前面底部に見られたものと同様に、土壘の強度を高めるためのものと捉える。それより上部はブロック状の土を含む層となり、明確に分層することは難しく、後の流れ込みと考えられる。

柱穴にかかる土層断面では、土壘壁面にかかる土層に見られた石敷きとその上部の薄い粘質の層はない。その他に大きな違いはない。柱穴部分においては、断面上に穴が開いて



第19図 28-4 トレンチ平・断面図

いる部分もあり、これまでに雨水等によるかなりの水が入った形跡がある。確認できる部分の埋土はトレンチ断面の土と連続する。また、この断面にかかる石敷きの見られない部分には、平面で見ても何らかの堀形があると考えられるが、現段階で確認するまでには至っていない。

5) 28-5 トレンチ

① トレンチの設定

本トレンチは北土壘の方向と登城道の存在の調査を目的として、登城道を推定する地点に設定した。ちょうど北土壘と南土壘間の距離が最も狭まる地点にあたり、その間を繋ぐトレンチである。

まず、北土壘に接する形で、幅60cm、長さ6mで掘削、その後南土壘まで1m幅のトレンチに拡大した。

② 成果（第20図）

本トレンチでも、北土壘の版築が見られる壁面と前面の石敷き、そして、柱痕跡を検出した。また、南土壘の壁面も確認した。

北土壘の石敷きの検出状況は、28-4 トレンチに続くものだと考えられるが、レベルは約35cm高くなっている。

トレンチ断面について、柱穴の上部にはほとんど埋土がなく空洞となっていた。これも雨水等の水の浸入によると考えられる。登城道を想定している部分であるが、締まりのある水平堆積の層がいくつか見られるが、明確な硬化面としてとらえることはできていない。さらに、一部掘り下げた部分においては、底の部分に数個の石が見られ、さらに検証が必要である。

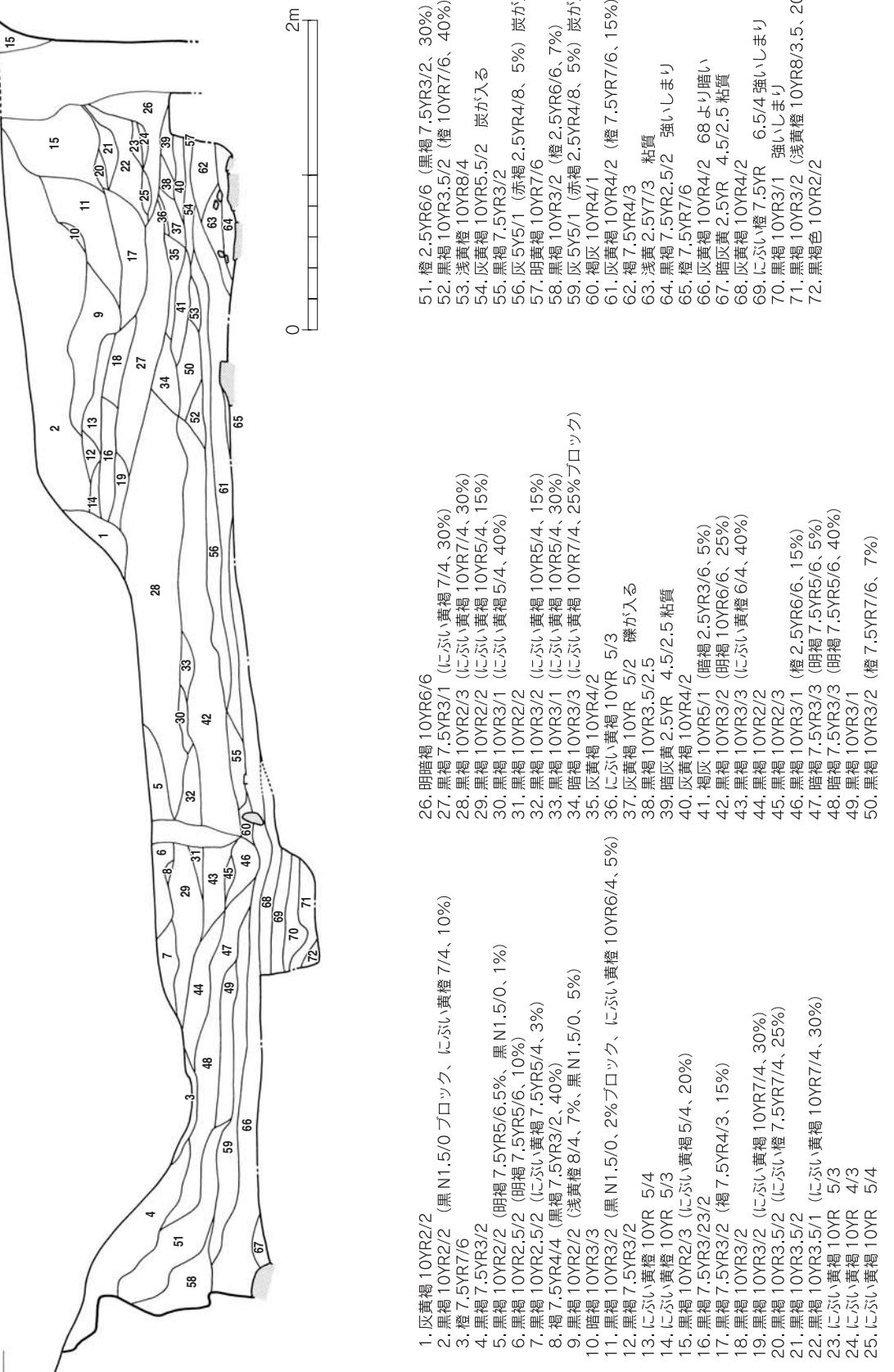
南土壘においては、壁面の前面を検出し、28-3 トレンチにつながるその方向を把握することができた。

トレンチ断面では、石列の一部かと思われる石を一つ検出した。その上部には、これも28-3 トレンチ同様、土壘の前に土を積んである程度しまりのある層が存在している。また、現段階においては土壘前面の最下部までの確認には至っていないため、今後明らかになる部分もあると考える。

2 小結

当該調査で、土壘前面の柱列及び石敷きが検出され、それにより、さらに土壘の規模及び範囲の把握ができた。

平成6年度の発掘調査時に、南土壘の東に、柱間約1.8mの柱列の存在が把握されてい



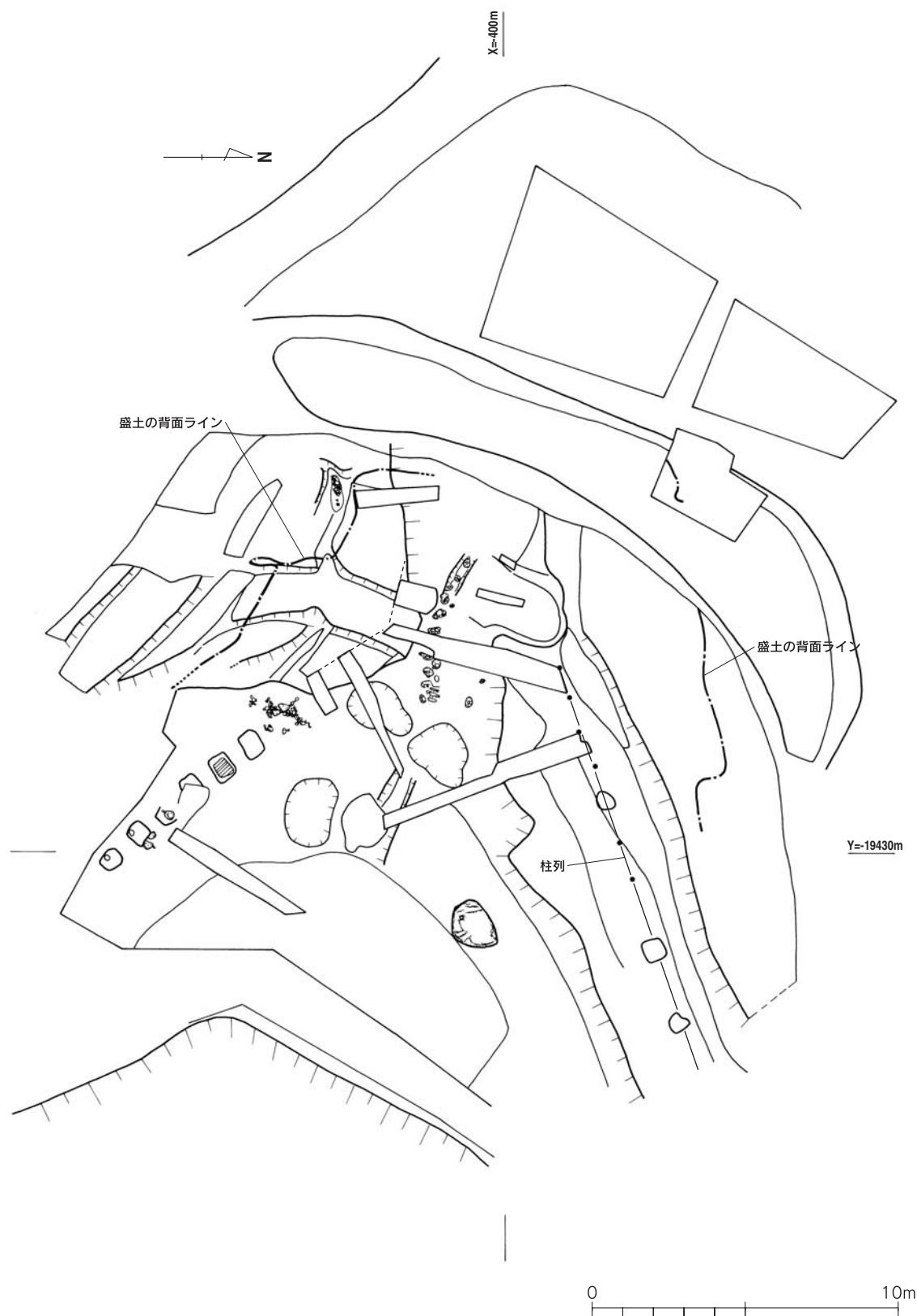
第20図 28-5トレンチ西壁土層断面図

たが、当該調査でさらに北に1間分の柱掘形を検出した。さらに北土壘においても、柱痕跡あるいは柱掘形を約1.8mの間隔で7間分検出した。28-4, 5トレンチにかかる柱痕跡は、やや盛土部分に食い込むような形で検出されており、版築工法における支柱であることが把握された。このようなことから、南土壘の東の6基及びその北の1基の柱掘形についても、盛土自体すでに消失してはいるものの、支柱穴であるものと判断できる。

土壘裾部の石敷きについても、平成6年度の調査時に南土壘の前面の一部に検出されており、その存在が想定されていた。当該調査では、南土壘の28-3, 8トレンチではその延長と土壘裾の石列が把握され、さらに北土壘前面の28-4, 5トレンチでも検出された。南土壘の場合、約30~45cm大の平石を使用した土壘裾の石列前面に、幅約1.2mの範囲に敷かれている状況が認められた。水平ではなく、外に向かい、約16度の傾斜で下りる。北土壘の場合、全体的な把握は困難であるが、28-4トレンチの状況から、幅約70~80cmと南土壘のそれより狭い範囲となり、やや粗である。南土壘、北土壘双方とも、上面を同じレベルである程度は揃えているようであるが、まばらであり、また、外縁の仕上げが粗雑であることから、見せようとの意識が薄い状況が見てとれる。南土壘前面敷石の上層には平成6年度に把握された赤褐色土の盛土層があり、また、北土壘においても土壘裾からやや下傾しながら約5.8m外にまで及ぶ水平堆積層が把握されており、それら盛土層に付随するものかどうか、今後の検討が必要である。

また、土壘前面の柱掘形と石敷きの関係であるが、南土壘の新たに見つかった柱掘形1基上面には石が敷設されてないものと判断でき、28-3トレンチでは明らかに、柱掘形の上面には石が敷設されていなかった。このような状況から、土壘本体の構築と石敷きは一連の工程の中に組み込まれていたものと判断できる。石を敷設した後に、一部石を除去して柱穴を掘り込み土壘本体部分の工事が始まったのか、柱穴を掘り込んだ状況で石を敷設したのか、などその先後関係は判断できないが、少なくとも、土壘本体工事がある程度完了した直後あるいはある程度の年月が経過した後に石を敷設したのであれば、支柱周辺まで及ぶはずである。

これら遺構の検出による土壘裾部を把握できたことにより、土壘の延長方向及び規模がある程度解明できた。南土壘は北西方向に延びており、北土壘はそれにはほぼ直角に折れ、北側の尾根の突端部に取り付く。その丁度、角の部分が門口となるものと思われる。南土壘の規模は、残存が悪く、部分的に残る盛土から、土壘幅約6.7m、土壘高約4.0mが想定される。また、北土壘の規模については、28-2トレンチから盛土の背面端部が確認されており、そこまでを含めると土壘幅約15m、土壘高約4.0mと、南土壘に比べて大きな土壘となる。しかし、城門の構造を考えると、高さは揃える必要があることから、南土壘も同様の規格をもつものと思われる。

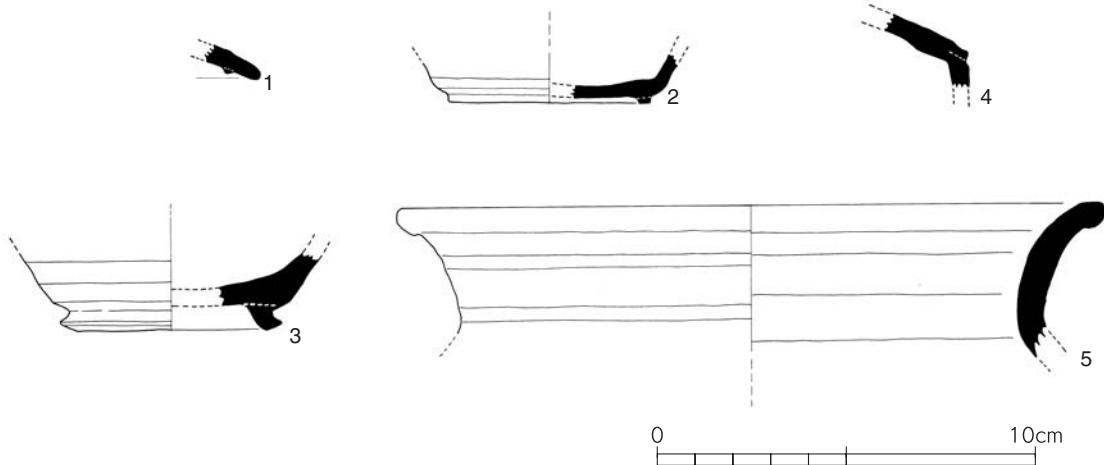


※熊本県文化財調査報告第152集『鞠智城跡－第16次調査報告－』1995
第16図を再トレスし、第28次調査のトレンチ・遺構を重ねたもの

第21図 遺構配置図



第22図 池の尾門跡



第23図 須恵器

以上、これまでの成果をまとめたが、この深迫門跡の発掘調査は継続しており、今後の調査で、より詳細な報告を行いたい。

第2節 池の尾門跡出土の遺物について

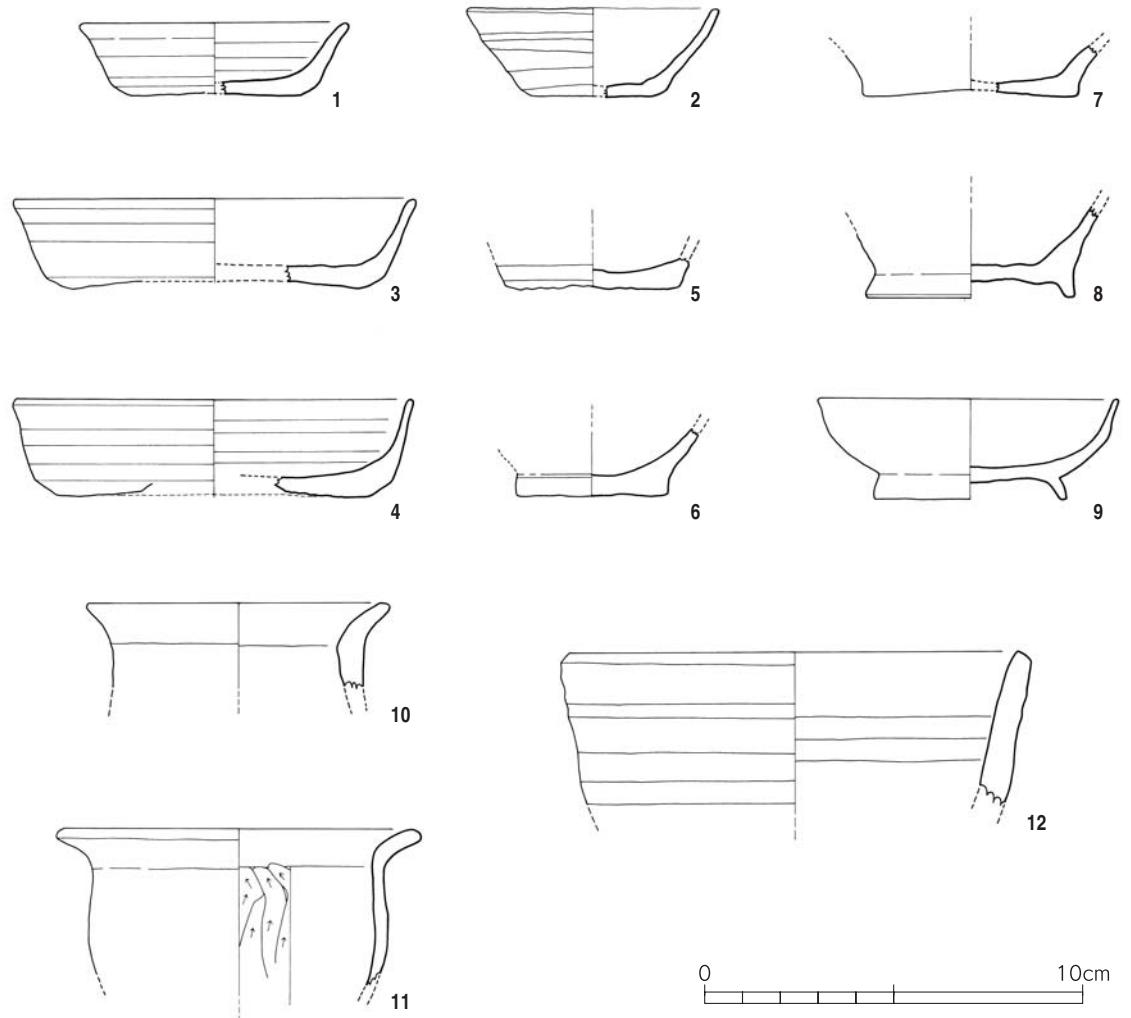
1 第26・27次調査

池の尾門跡は、城域南西隅に所在する城門跡である。南側土塁線の西隅から北に折れた外郭線は、池の尾谷の最も狭まる地点で谷を渡り、灰塚頂部から延びてくる尾根に取り付くことが想定されている。この谷渡りの箇所は、標高90mと城跡内でも最も低い場所となる。この地点には、古くから門礎石が所在し、門跡が推定されていた。

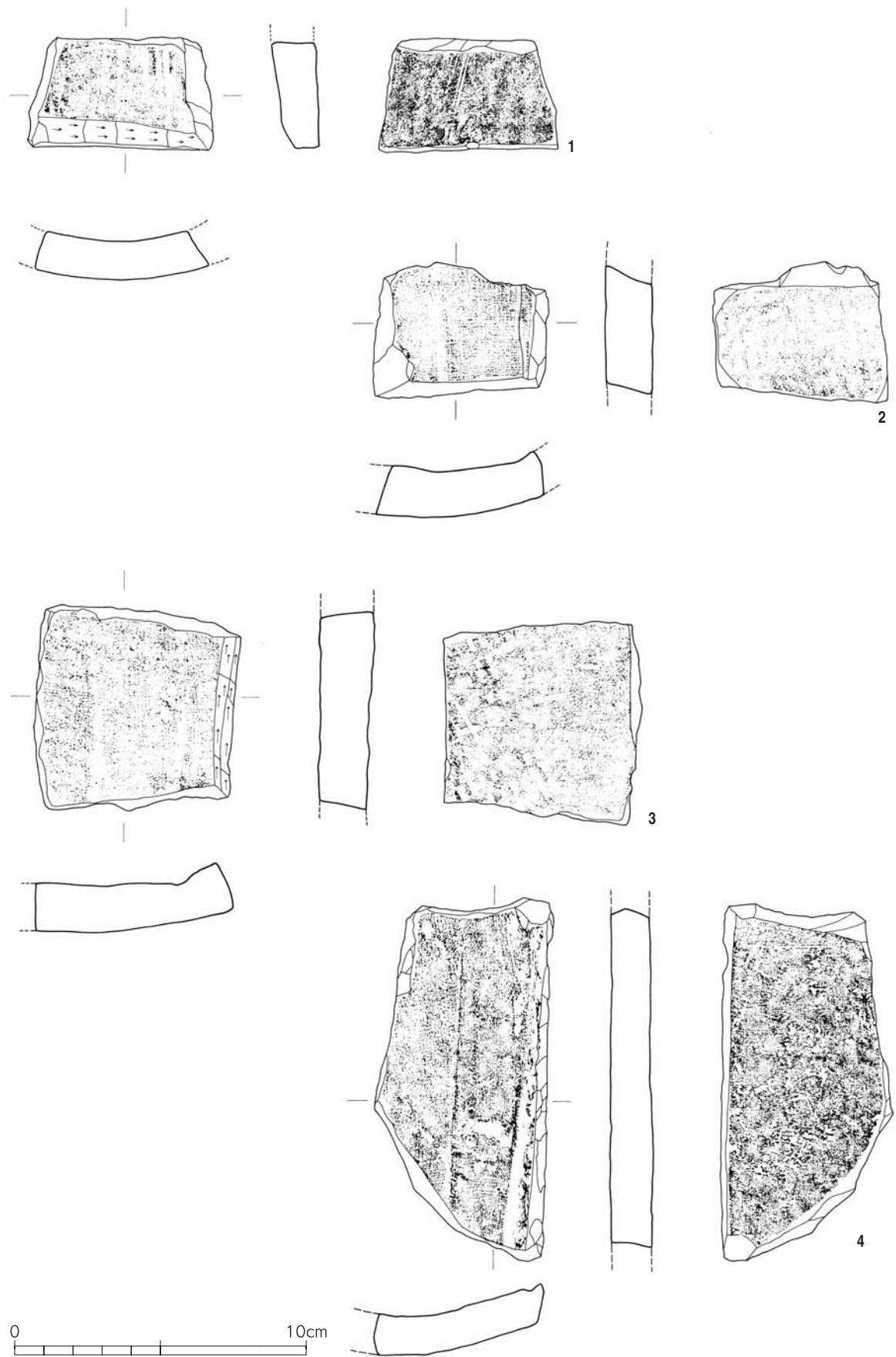
この池の尾門跡における最初の調査は昭和42年度に実施され、門礎石がすでに原位置から動いていること、さらに多数の礫・石の存在から石墨の存在が想定された。この成果を受けての再調査が、平成16・17年度にかけて実施した第26・27次調査である。調査の目的は、門礎石の原位置を解明すること、さらに石墨の存在の有無を確認することであった。その結果、約9.6m幅で平行する石列を検出し、その周辺に石が散在していたことから、石墨の存在がほぼ確実となった。さらに背面の石列から約7.5m城内側に取水口を持つ暗渠排水溝を検出し、鞠智城跡では初めての水門構造であることを確認した。さらに、取水口まで導水する側壁を石積みとする幅1.2mの溝も検出した。残念ながら、門礎石の原位置の割り出しまでは至らなかつたが、遺構の検出範囲から、現在の市道下になることを推定した。また、石墨前面に礫敷きを基底部に持つ盛土も検出している。

2 遺物の出土状況

第26・27次調査の出土遺物は、数十点にも及ぶが、そのほとんどが碎片で形状を復元できるものは極めて少ない。中世、近世遺物も若干量含まれているが、古代の遺物として



第24図 土師器



第25図 瓦

認定できるものは、須恵器、土師器、瓦片がある。

石墨自体、後世の攪乱で基底部の石列を除きその大部分が崩壊しており、遺物の多くはその埋土に包含された状況が認められた。さらに、その下層から中世の土師質土器の底部片（糸切り底）が出土したことから、中世以降に何らかの要因で崩壊したと結論付けた。

石墨背面石列の城内側遺構面からの出土が若干認められた。いずれも碎片で、時期を追えるものは少ないが、これら遺物が遺構の存続時期の下限を示すものと思われる。

3) 出土遺物

①須恵器

第23図1～5は、須恵器である。1～3は石墨基底部の上層、灰青色砂質土中から、4は表採、5は石墨背面の遺構面直上からの出土となる。

1は壺蓋の口縁部片である。やや扁平な形状になるものと思われ、端部を丸く仕上げる。口縁端部より1.2cm内側に僅かななれりがつく。内外面ともナデ調整を施し、比較的丁寧な作りである。2、3は高台付き壺である。2は底部片で、底部径9.0cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、底部縁よりやや内側に高台がつく。高台は0.2cmと低く、端部を平たく仕上げており、扁平な感を与える。器厚は薄い。底部は、ヘラケズリ後、ナデ調整を施しており、丁寧な作りである。3も底部片で、底部径9.3cmを測る。体部はやや丸みを帯びながら立ち上がるものと思われ、底部端よりやや内側に高台がつく。高台は0.9cmとやや高く、端部を外に向けてつまみ上げている。器厚は厚く、重厚な感を与える。体部外器面はヘラケズリ後ナデ調整を施す。4は長頸壺の胴部片と思われる。肩部はやや丸みを帯びており、最大径からほぼ垂直に下りる。外器面の肩部から最大径にかけて自然釉がかかる。胎土に砂粒は少ない。5は大型甕の頸部～口縁部片である。口径28.0cmと大きく、頸部から外反しながら立ち上がり、口縁端部を折り曲げながら丸く仕上げる。

②土師器

第24図1～12は土師器である。各遺物の出土地点は、第24図1、2、4、5、8、11、12は、石墨背面の地山直上から、6は灰白色粘土層、7は通水溝上面から、3、9は灰青色砂質土からの出土となる。

1～7は壺である。1は残存状況が比較的良好、器形が復元できる個体である。口径10.7cm、底部径6.8cm、器高2.9cmで、器高が比較的低い。体部はやや外反しながら立ち上がり、口縁端部を丸く納める。底部はヘラ切り後、ナデ調整を施す。内面に煤が付着している。2も残存状況が良く、器形が復元できる。口径10.0cm、底径4.8cm、器高3.5cmを測る。底部端から口縁部に向かって外傾しながらほぼ直線的に立ち上がる。器厚は比較的薄い。

器壁全面に丁寧なナデ調整が施されており、丁寧な作りといえる。3、4は大型の壺である。3は器形が復元でき、口径16.0cm、底部径11.5cm、高さ3.6cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部近くで、やや外反する。4は3に比べ、やや底部は肉厚があり、上げ底氣味となる。口径15.5cm、底部径12.5cm、高さ3.9cmを測る。かなり細かなナデ調整を施す。5は底部片で、底部径7.0cmを測る。底部は肉太感がある。6も底部片で、底部径6.0cmを測る。体部は直線的に外傾することが予想され、底部端はやや外に張り出し、底部厚は比較的厚く、0.9cmを測る。底部はヘラ切り後、ナデ調整を施している。7も底部片で、底部径8.6cmに復元できる。底部端がやや外に開き、6と形状が似るが、底部厚が中央に向かい薄くなる。底部はヘラ切り後、ナデ調整を施している。

8、9は高台付き壺である。8は底部片である。高台を底部端に付し、体部は直線的に立ち上がることが予想される。高台は径8.3cm、高さ0.6cmを測り、直立する形状で、端部を平たく仕上げる。9はほぼ完形品である。口径11.9cm、器高4.0cmを測る。全体的に丸みを帯びた形状で、体部はやや屈曲を伴いながら内湾すし、口縁端部付近でやや外に開く。高台は径7.2cm、高さ0.8cmを測り、やや内湾した形状。端部はやや丸みを帯びる。丁寧なナデ調整が施されており、内器面が摩滅している。

10は短頸壺の口縁部片である。胴部はやや直線的に下りるものと思われる。口縁端部を丸く仕上げる。11は小型の短頸壺片である。口径14.5cm、胴部最大径11.8cmで、胴部最大径は、頸部径よりやや膨らむ程度で、口縁部は外反しながら立ち上がり、口縁端部を丸く仕上げる。下から上へ、強めの指ナデで器形を整える。底部は残存部から丸底となるようである。12は大型の直口壺の口縁部片である。肉厚があり、ほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部を平たく仕上げる。

③瓦

第25図1～4は平瓦片である。1は狭端部片で、最大長5.7cm、最大幅9.4cm、厚さ2.2cmを測る。凹面の縁を削りによりやや斜めに整形する。凹面に浅い条痕が残り、凸面にハケメ後ナデ調整を施す。2は側端部片である。最大長6.1cm、最大幅8.7cm、厚さ2.7cmを測る。凹面に布目痕と幅4.3cmの模骨痕が残る。凸面はナデ調整を施す。3は側端部片である。凹面に布目痕と幅4.2cmの模骨痕が残る。凸面に格子目タタキを施した後、軽いナデ調整を施す。端部は細かなヘラ削りを施している。1～3については、長方形状の残存状況であり、故意に形を整えた様相を呈しており、これまでに鞠智城跡から複数の報告がある、瓦の2次加工製品の可能性が高い。4は側端部片である。凹面に布目痕と幅3.5cmの模骨痕が残る。凸面は磨耗のため調整が不明である。各遺物の出土地点は、第25図1、3は石墨背面から、2、4は表採となる。

第1表 遺物観察表① (第23図)

No.	出土地点	層	器種・部位	法量(cm)	色調(内／外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	池の尾		須恵器 壺蓋	器高(2.2)	灰色	砂粒多。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	ヨコナデ	良	
2	池の尾		須恵器 高台付椀(底部)	底径(8.0) 器高(1.5)	灰色	砂粒多。雲母0.5~2mm 大の白色粒少量含	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ削りーナデ 回転ナデ	良	
3	池の尾		須恵器 高台付椀(底部)	底径(7.5) 器高(2.8)	灰色	0.5mm以下の砂粒多 量石英、雲母、角閃石少 量含	ヘラ削り→ ナデ調整	回転ナデ	ナデ	良	
4	池の尾 1t	濃茶色土一括	須恵器 鎏銅部	器高(11.6)	灰色	砂粒多。0.5mm~2mmの 白色粒多	細目格子 タキ	円文タタキ		良	
5	池の尾 e区 No.27		須恵器壺 (口縁)	口径(11.4) 器高(6.2)	橙色	砂粒多。	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	

第3表 遺物観察表③ (第25図)

No.	出土地点	層	器種・部位	法量(cm)	色調(凹／凸)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							凹面	凸面	側面		
1	池の尾 e区 No.2		平瓦 (狭端部)	最大長 9.4 最大幅 5.6 厚さ 1.2~ 1.3	灰色	砂粒多。多量の雲母、 角閃石を含			ヘラ削り	良	
2	池の尾	表採	平瓦	最大長 6.8 最大幅 8.8 厚さ 2.1 ~2.7		砂粒多(0.5~1cm大の 白色粒、雲母、角突石 を含)				良	
3	池の尾 e区 No.5		平瓦 (側端部)	最大長10.5 最大幅10.2 厚さ 2.1 ~2.7		砂粒多。0.5~0.7mm大 の白色粒、雲母、角閃 石を多く含	布目痕 模骨痕	正方形格 子目タタキ →ナデ	ヘラ削り	良	
4	池の尾 8t付近水 路	表採	平瓦 (側端部)	最大長 8.8 最大幅17.2 厚さ 2.2	灰色	砂粒多。0.5~3mm程度 の白色粒、角突石多	布目痕 模骨痕	磨耗の為 調整不明			

第2表 遺物観察表② (第24図)

No.	出土地点	層	器種・部位	法量(cm)	色調(内／外)	胎土	調整・文様			焼成	備考
							外器面	内器面	口唇・底部		
1	池の尾 No.33		土師器壺	底径(6.8) 器高(2.9)	内 にぶい 外 橙色 橙色	砂粒多。0.5mm~1mmの 白色粒0.5mm~2mmの赤 色粒、石英多	ヨコナデ	ヨコナデ (内面ス ス付着)	ヘラ切りーナデ	良	
2	池の尾 e区 No.18		土師器壺	口径(10.0) 底径(4.8) 器高(3.5)	橙色	0.5mm程度の砂粒多。 石英、雲母、赤褐色粒 少量含	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	良	
3	池の尾 取水口	灰青色砂質土 (水路内一括)	土師器壺	口径(16.0) 底径(11.5) 器高(3.6)	橙色	砂粒多。0.5mm~1mm大 の白色粒、赤色粒多	回転ヨコ ナデ		ヘラ削りーナデ		
4	池の尾 No.36		土師器壺 (底部～口縁)	底径(12.5) 口径(15.5) 器高(3.9)	橙色	砂粒多(白、赤色粒、 石英)	回転ヨコ ナデ	回転ヨコ ナデ	ヘラ 削り 剥離	良	
5	池の尾 e区 No.29		土師器壺 (底部)	口径(4.1) 器高(1.1)	橙色		ヨコナデ	回転ナデ (?)	ナデ	や や 不良	
6	池の尾	灰白色粘土層 一括	土師器壺	底径(6.0) 器高(2.6)	にぶい橙色	砂粒多。(0.5~1mmの 角突石、石英)少量の 白色粒	ヨコナデ (1部スス 付着)	ヨコナデ	ヘラ切りーナデ (?)	良	
7	池の尾 h区～g区 間	畔中一括	土師器壺 (底部)	底部(8.6) 器高(1.7)	橙色	砂粒多(石英、角突 石、赤、白色粒)	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラ切りーナデ	不良	
8	池の尾 No.35		高台付き壺	底径(8.3) 器高(3.6)	にぶい橙色	砂粒多 (0.5~2.0mm 程度の白、赤色粒、 石英多、角閃石少	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良	
9	池の尾 12t	灰青色砂質土	土師器壺		内 橙色 外 にぶい 橙色	砂粒多(赤色粒、石英 角突石)	ヨコナデ	磨耗により 調整不明	ヨコナデ ナデ	不良	
10	池の尾	蓋石下 握乱	壺口縁	口径(12.0) 器高(3.3)	橙色	砂粒多(2~4mm程度の 小石、1~2mmの石英、 角突石、白色粒)	磨耗により 調整不明	ヨコナデ (?)ヘラ (?)	ヨコナデ(?)	不良	
11	池の尾 e区 No.4		土師器壺	口径(14.5) 器高(6.2)	橙色	砂粒多。石英、角突石多	ナデ	ヘラ削り	ヨコナデ(内 口 縁部スス付着)	良	
12	池の尾 e区 No.24		土師器壺	口径(7.5) 器高(6.2)	にぶい橙色 (内外面とも にスス付着)	砂粒。0.5mm~4.0mmの 白色粒、雲母多、角閃 石少	ヨコナデ	ヘラ削り→ ヨコナデ	ナデ	良	

第Ⅲ章 まとめ

平成6年度に実施した第16次調査において、鞠智城跡では初めての版築盛土による土壘が検出された。当時の調査は、基本的に表土を剥ぐだけの調査であったが、後世に造成された段地形の法面において鞠智城跡では初となる版築土層を確認し、さらに南側裾に並ぶ柱掘形6基、河原石を窪みに入れた登城道を検出するなど、大きな成果を上げている。

今回の調査では、この版築土壘の規模やその構造、さらには門礎石の原位置の解明を目的とする再調査であった。残念ながら、門礎石の原位置までの解明には至らなかったが、第16次の検出面に部分的なトレンチを入れることにより、土壘の規模や土壘構造の一部が把握され、さらに土壘構築の手順が推測されるなど、より具体的な成果が上がった。さらに、堀切門跡、南側土壘線西端部（B地点）、西側土壘線北端部（シャカンドン地区）、池の尾門跡においてこれまでに検出された土壘と比較して、新しい要素も一部に認められた。

ここでは、この深迫門跡の土壘について、土壘の特徴（形状、規格、構造、材質）を改めてまとめ直し、さらには土壘の構築の手法について検討を加えたい。

第1節 土壘の特徴について

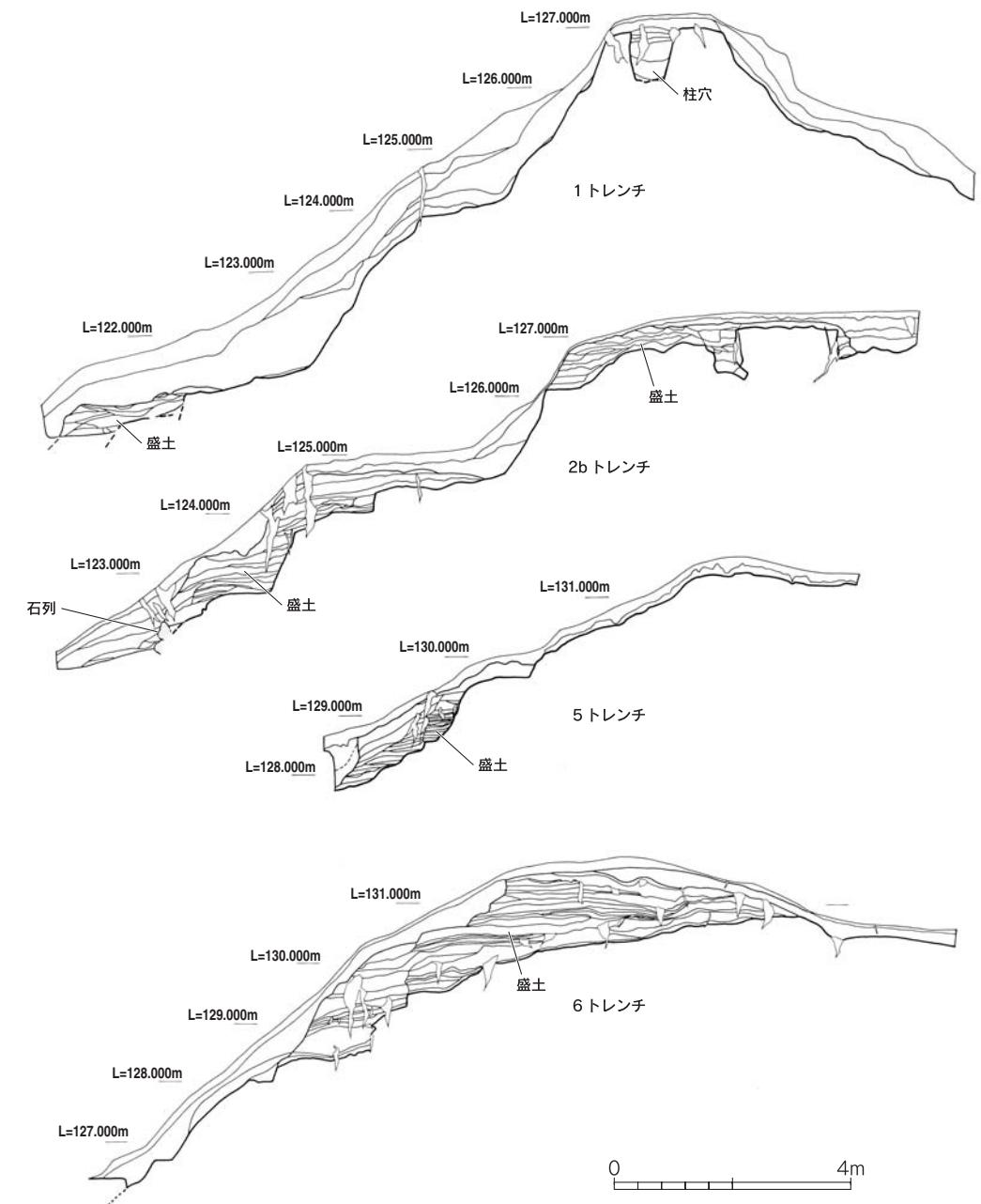
1 土壘の延長

深迫門跡の土壘は、城門の両脇に取り付くもので、広い谷部を遮蔽する目的で構築されたものである。第16次の調査では、後世に造成された切土面で把握した版築土層をつなぎ、版築土が及ぶ範囲を図示したのみで、実際の土壘前面（城壁面）の把握までは至っていなかった。今回の調査では、残存する版築盛土の範囲や柱掘形の配置から、門口（推定）を挟み、ほぼ直角に折れる形で南北に土壘が配置されていることを把握した。

南側の土壘については南西側の斜面を伝い、南東から門口に向かって北西方向に延びており、門口を挟んだ北側の土壘については北東方向に延び、北側に所在する痩せ尾根の東端部に取り付くことが考えられる。

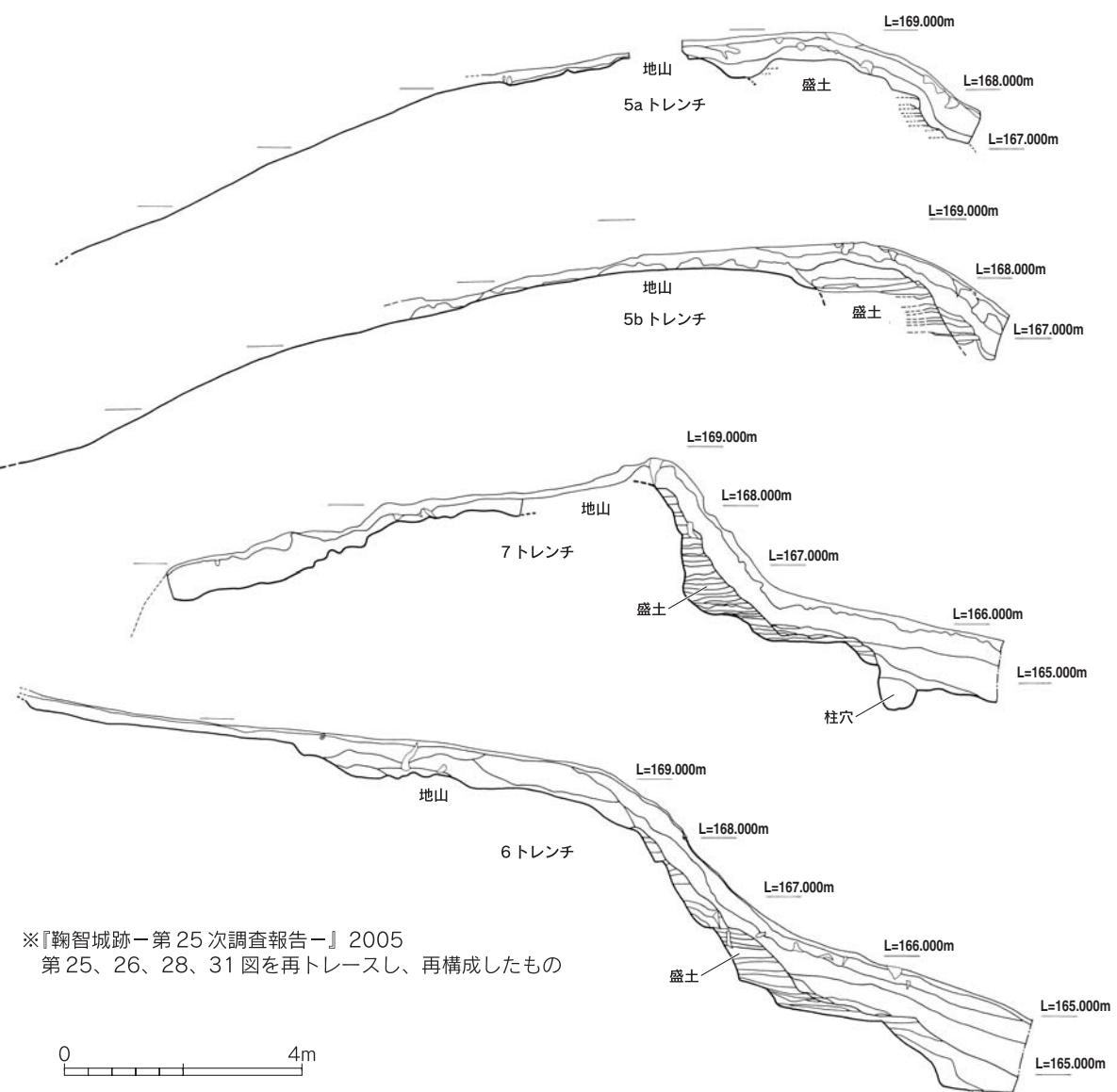
2 土壘の形状及びその規格

両土壘とも、後世の切土により削平が激しく、形状を復元するのは極めて困難な状況にある。北土壘における背面端部の整形から内托式の土壘が想定される。規格については、版築盛土の残存部から、南側土壘高さ4.0m以上、奥行き6.7m以上と具体的な数値を与えることはできなかつたが、北側の土壘においては、版築土の背面が把握されたことから概ね高さ4.0m、奥行き15.0mとなることが判明した。奥行きについては、南側の斜面が急であり、微妙な地形を取り込んで構築されたものと考えられるため、数値に違いを見せ



※『鞠智城跡－第25次調査報告－』2005
第14、15図を再トレースし、再構成したもの

第26図 南側土壘線西端部の土壘



第27図 西側土墨線北端部の土墨

るが、土墨の高さについては、両者ともほぼ統一規格のように思える。

鞠智城跡の土墨の場合、南に面する土墨においてより高く構築する意識が働いていることが以前の調査で判明している。西側土墨線北端部の土墨が約3.6mの高さで復元できるのに対して、南面する、堀切門跡の土墨では約13mと非常に高く、南側土墨線西端部では5~8mを測る。ただ、これらは、削り出し、盛土を併用し、中位にテラスを設ける2段構造となる土墨である。南側土墨線の場合、凝灰岩の侵食作用によって形成された切り立った斜面の尾根筋に構築されており、自然地形だけでも十分防御機能は果たすものと考えられる。それでも、あえて土墨を構築しているのは、南に対する視覚的効果を狙ったものとの見解を以前提示した。深迫門跡の土墨の場合は、高さはあるが、後述する補強盛土の

存在からも強固なものに仕上げる意識が働いていることから、防御面を重視した結果の高さといえる。

3 土墨の構造

土墨の構造は、版築盛土により土墨本体と、さらに外側の裾部を盛土で補強する構造が認められた。さらに、北側の土墨については、基底部に約5m先までテラス部を造り出していることが予想される。

土墨本体の裾部には前面をある程度揃えようとの意識が見て取れる平石を隙間なく並べる状況が看取された。土留めのための基礎石となるものであるが、南側土墨線西端部の土墨裾部並びに西側土墨線北端部の土墨裾部における石列においては、南側土墨線西端部のものが小振りな石を使用し、また西側土墨線北端部のは隙間を設けながら並べている状況が認められている。これらと比較して、深迫門跡の場合、大小違いはあるものの、比較的大きなしっかりとした平石を並べることを特徴とする。また、池の尾門跡の土墨の場合、透水層を設けるための措置として土墨の基底部にバラス状に石を敷き込んだ状況が認められたが、同じ谷部でも深迫門跡の土墨にはそれがない。

盛土については、土墨本体の盛土は凝灰岩をベースとする黒色土と白色土の互層となる。一部に黄色、赤色など粘質土をベースとする盛土部分が存在するが、修築の際の盛土である可能性が高い。また、外側の裾部の盛土については、赤色を基調とする粘質土で構成されるが、硬化はしているものの、版築のように叩き締めた状況は認められない。その基底面には、土墨本体裾の石列から約0.7~1.2m先まで、約10~30cm程度の石を敷きこむ状況が認められた。石敷きの上面あるいは前面を揃えるような意識が見て取れないことから、地滑りを起こさないよう、「捨て石」的な役割があったものと考えられる。

また、土墨本体の構築に伴う土墨前面の柱掘形あるいは柱痕跡を確認した。南土墨のほうで第16次調査時に検出した6基の柱掘形のさらに北に1基、北土墨のほうでは土墨本体にめり込んだような状況の柱痕跡6基（うち1基は柱掘形まで。）と柱掘形2基を検出した。第16次調査で検出した柱掘形6基についても、その背面に盛土等が認められず、当時の調査では、柵跡との見解が示されたが、土墨本体裾の石列と同一方向に並ぶことから、土墨前面の柱掘形であることが判明した。柱間寸法については、柱痕跡から約1.8mであることが推定されていたが、今回新たに検出した北土墨の柱間も約1.8mの等間隔に配置されていた。西側土墨線で検出された土墨前面の柱穴列は芯々で約2.1mかそれより短くまばらな状況で、さらにそれと対を為す土墨頂部の柱穴列は芯々で約1.3~2.3mとまばらであった。これと比べると、深迫門跡の場合、比較的しっかりと丁寧に造りだしていることが分かる。また、柱痕跡は、土墨本体に半分めり込んだような状況で見つかっており、

構築後もそのままの状況で残存していたことが推察される。このことから、土壘構築の際の堰板は、柱の最大直径付近に結び付けられていたことが想定される。

4 土壘の材質

深迫門跡が立地する箇所は、堆積原面が凝灰岩となっており、盛土については基本的には、凝灰岩をベースにした土で構成される。黒色土は凝灰岩が土壤化したものと考えられ、白色土については凝灰岩上に自然堆積する白色土で、いずれも、地山整形の際、生じた土砂か、あるいは周辺から採取してきた土砂と思われる。ただ、修築が想定される部分の土砂については検討が必要であるが、凝灰岩を堆積原面とする南側土壘線西端部の盛土の状況に似る。これに対して西側土壘線北端部及び池の尾門跡の土壘では、花崗岩を堆積原面としていることから、まさ土を利用しておらず、その地点の土砂をベースとする、これまでの調査結果と符合する。

土壘本体裾部の石列及び外側盛土基底部の石材については、一部、軽石がまじるもの、安山岩系の石材を利用しておらず、城外から搬入してきたものを利用している。

第2節 土壘の構築について

1 土壘裾部の整形

土壘構築の手順を推察する前に、まず、特筆すべきは、土壘本体のさらに外側の裾部に盛土をしていたことである。当初、土壘本体の外側については、修築の可能性も念頭に入れたが、28-3トレンチにおいて外側盛土の基礎部分にあたる石敷きが柱掘形まで及んでいない状況から、一体的な施工であることが推測された。もし修築したのであれば、柱の直前まで石を敷きこむことが予想されるからである。このことは、南土壘の新たに見つかった柱掘形の上面及び後世の切土法面裾にまとまった集石が認められない状況からもいえる。これらの検出状況から推察すると、外側盛土自体は最後の行程であったものと思われるが、石敷きについては基礎部の造成当初から存在した可能性が高く、構築当初から外側盛土を想定していたものと考えられる。

2 土壘の構築手順

こうした状況から、土壘構築の手順を考えてみたいと思う。まず、土壘本体を断ち割るトレンチを設定していないため地山整形についてははつきりしないが、南側土壘線の例から谷部の両脇斜面を階段状に整形したものと思われる。その後、裾部に基礎石を据え、土壘本体部の盛土に移行するものと思われる。外側盛土の石敷きについては、28-3トレンチにおいて裾部石列よりやや高いレベルとなることから、ある一定の高さまで盛土した後に、

敷かれたとの見方ができる。この石敷き後に石を取り除いたか、あるいは約1.8mの間隔で柱穴を掘るスペースを空けて石を敷いたかは判然としないが、石敷き後に、堰板を止めるための支柱が立てられたものと思われる。それまでの盛土部分については、支柱によらないなんらかの方法で版築したものと思われ、その後、約1.8m間隔で支柱を立て土壘本体を構築し、外側裾部に補強盛土をしたものと考えられる。

第3節 今後の課題

今回の調査で、深迫門跡の土壘についてより具体的な構造が明らかとなり、これまでに検出した堀切門跡、南側土壘線西端部（B地点）、西側土壘線北端部（シャカンドン地区）、池の尾門跡の土壘と併せて、鞠智城跡における土壘構築のあり方についてある程度の見解を提示するところまできたように思える。

基本的には、その地点毎の自然地形を巧みに利用し、その地点に応じた様々な工夫で土壘を構築しているものと思えるが、その反面、それが故に、土壘の構成要素に微妙な差異が生じているのも事実である。ただ、今回の深迫門跡の調査では、城門脇の土壘ということで、土壘線の土壘と比べて比較的しっかり構築しているとの印象を受けた。残念ながら、今回の調査では、門礎石の原位置の究明までは至らなかったが、土壘の幅等がある程度具体化されたことから、門礎石の原位置に一步近づいたものと判断でき、次回の調査で明らかにしたい。

〔引用・参考文献〕

- 熊本県教育委員会編 1983 熊本県文化財調査報告第59集『鞠智城跡』
- 熊本県教育委員会編 1995 熊本県文化財調査報告第152集『鞠智城跡－第16次調査報告－』
- 熊本県教育委員会編 2000 熊本県文化財調査報告第191集『鞠智城跡－第21次調査報告－』
- 歴史公園鞠智城・温故創生館編 2003 『鞠智城跡－第23次調査報告－』
- 歴史公園鞠智城・温故創生館編 2005 『鞠智城跡－第25次調査報告－』
- 歴史公園鞠智城・温故創生館編 2006 『鞠智城跡－第26・27次調査報告－』

写真図版

図版 1



深迫門跡調査区全景（真上から）

図版2



深迫門跡調査区近景（真上から）

図版3



深迫門跡調査区全景（東から）

図版4



深迫門跡調査区近景（西から）

図版5



28-2 トレンチ（北から）



28-2 トレンチ（西から）

図版6



南土墨前面及び石敷き検出状況（北東から）

図版7



南土墨石敷き検出状況②（北東から）



南土墨石敷き検出状況①（北東から）



南土墨石敷き検出状況③（南から）

図版8



28-4 トレンチ①（南から）

図版9



28-4 トレンチ③（北から）



28-4 トレンチ②（南から）



28-5 トレンチ①（東から）



28-5 トレンチ②（北から）



28-5 トレンチ③（北東から）

ふりがな	きくちじょうあと						
書名	鞠智城跡						
副書名	第28次調査報告						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名							
編集機関	熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館						
所在地	熊本県山鹿市菊鹿町米原 443-1						
発行年月日	2007(平成19)年3月31日						

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせき 史跡	くまもとけん やまがし 熊本県 山鹿市			°	°	(自)20060822	約5,000 m ²	遺跡整備
きくちじょうあと 鞠智城跡	きくかまちよなばる 菊鹿町米原			'	'	(至)20070330		
	くまもとけん きくちし 熊本県 菊池市			"	"			
	きの 木野							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鞠智城跡	史跡	古代	深迫門跡 土壘 版築盛土 石列 石敷き		深迫門跡調査区において版築土壘の範囲等、土壘構造を解明

鞠智城跡

— 第28次調査報告 —

平成19年3月31日

編集発行 熊本県立装飾古墳館分館

歴史公園鞠智城・温故創生館

〒861-0425 熊本県山鹿市菊鹿町米原443-1

TEL (0968) 48-3178

印 刷 株式会社 大和印刷所

〒862-0931 熊本市戸島町920-11

TEL (096) 380-0303(代表)

この電子書籍は 鞠智城跡 第 28 次調査報告 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：鞠智城跡 第 28 次調査報告

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL : <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2022 年 6 月 15 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL : <http://www.kumamoto-bunho.jp/>